戊辰漫録

昭和参年第八月上浣起筆

三

特別
14
1919
405

176670

戊辰漫録 三

昭和三年八月上浣起筆

○張作霖爆殺の下手人に就ていろ〳〵の説あれども清国に在る邦人ハ皆異口同音に窃かに下手人の日本人なることを語る、あの位な爆薬の仕掛が便衣隊などに出来るものでない。張ハ変を恐れて室を変へしにこれといふのに、その内報する者知つてゐて爆弾といふもの知つてゐたハ益々疑惑を深ふせざるを得ぬ。兎角日本ハ粗暴な国である。露骨なるに悪し将朝鮮王妃を殺し、陰険殺伐の歴史ハ掩はんと

勝川春章　　婦女圖

38- 9191

しその捗ゆかざることが少なからず、而も通つて要路の士の
あることなき困りとするのである。張そもそも得意
の時ここそ、日本の国運を考えて救きもま
家境に陥り落ぶれ行るをも得るこそ
楽んを活かしても置きその国をして
かつその日その利益を未ここもるようと
人を、薬んこの如き異常の事を出すべき外交
を知らず武断政治家の失態を云ハ
ず、
田中内閣の支那と為す外交の不手際に終に果
国に至りぬるなれど、追々おいおい三人とす、
武断政治家ハ外交を能力あるものの如

ず、彼等と外交を托するハ、国家を危殆に
導くものなることを
七ずくし、国家の大患を
到底薬等に任す可
○江戸城の建築史料
に保管さんてあり、
に供するのつき、その大変か都
から、こゝに其切抜を収めおく。
○江西通信紀念の
の取向につき
楽秋のあと、河南
其一、河南関係の文

大奥の秘事も探れる
江戸城の建築史料展
八月一日から一週間
上野自治會館と三越で開催

現在殘つたかと云ふと明治維新の大政奉還の當時神田皆川町和泉橋河岸の櫻澤甲良筑前に對し新政府は江戸城繪圖の沒收を申渡した、仕方なく甲良は家人と水杯を交して何人も知る事の出來ない地下室の黒ぬりの箱に收めてある繪圖二千點のうち三百點を選び標準が上棟式に用ゐた軍配團扇、大棟、紅葉山、吹上、御座間、大廣間、御黒書院、御白書院、御殿の設計圖と共に詳しい說明が書き入れてあるから何人にも興味が湧く事であらう

◇

面白いのは淺野內匠守が殿中松の廊下で吉良上野を刃傷した忠臣蔵の發端、即ち芝居でやる松の間の松の繪が全然書割と違つてゐる事である、別掲の寫眞を見ればよく判かるがこれなどは今後忠臣蔵の芝居をやる時に幾分問題になるのではなからうかとも思はれる、又明暦の振袖火事で燒かれた天守は高さ百七十尺で、丸ビルよりも七十尺高く一階七百疊、二階四百疊と云ふ恐ろしい廣さで、それが五階になつてゐるのなども今毎日ドンを打つてゐる天守臺跡と思ひ合はせて今昔の感に堪へないものがある

◇

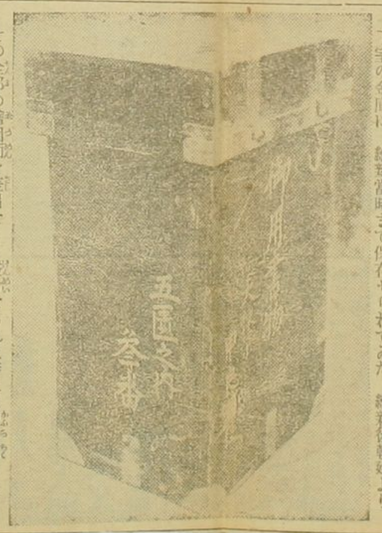
尙一日は午後一時から自治會館で伊東忠太、高須梅溪の二氏、四日は同じく午後一時から三越ホールで山中笑、大熊喜邦、三田村鳶魚氏の江戸城に關する趣味ある講演も行はれる、入場は無料だから一日この江戸城の中に入り込んで大奥の秘密を探るのも避暑の一方法である

八月一日から七日まで三越ホールと上野自治會館の二會場で催される日比谷圖書館主催の江戸城建築史料展覽會は、專門の建築家より も大衆文學の作家やその讀者連、或はそんな事に無關心の一般の人々にとつても何々興味あるものを提供せんとしてゐる

◇

寬永の造營の時から元治の假普請に至る江戸城建築の大模型甲良家に傳はる御作事方書類のうち最も極秘とされてゐたものがどうして命にかけた繪圖面箱

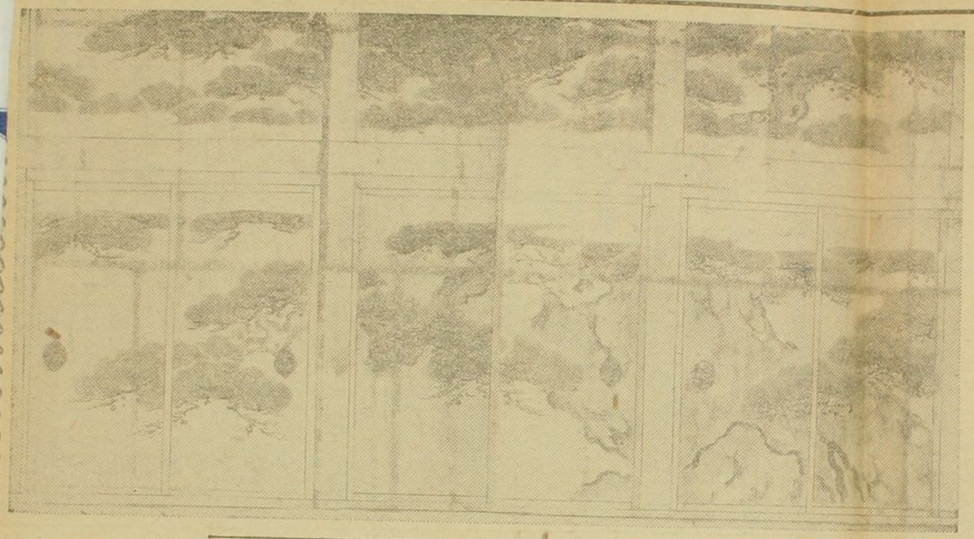
この御用書物と記されてある靑貝箱の中に、甲良家所藏の江戸城繪圖面（寬永以後元治に至る）が堅く秘められて神田皆川町（和泉橋河岸）の甲良家地下室の金庫に、維新當時まで保存せられてゐた、維新後舊幕臣より



その全部の繪圖を差出せよと嚴命せられた時には甲良筑前は、家內と水盃までして繪圖を携行して登城した相である、幸ひ勝安房の盡力によつて繪圖は全部甲良の手にかへつた、これが現在日比谷圖書館の重要な所藏になつてゐるのである

「松の廊下」眞の見取圖

江戸城の松の廊下は普通十三間廊下といはれ、城中でも竹の廊下と並び稱せられる大廊下である、之はその廊下の松の繪の圖の見取圖でこの繪圖によつて今後あの「松の廊下の刃傷」の實況も本格で行くやうになりはしまいか（日比谷圖書館藏）



今をひらくこと其二、こんを一の成都の後、社会と交渉して設会を開くこと其三、表面は孝三者に当らしめ、内に於ての指導を為すも一葉子、橋勢的のの花紀人千ちる宇宙のそれ迄のプに附し一冊可そる西洋先その、ペーパ、カットメイ的の方法くいまでの一束と余思いつきを述ることのをを危ぶる。沈勢を或るを展設会をを借して

横原蔵

退の共心でる沈勢に水甚だ大切である。

○金が任海状態こ救済の変化もまこる追って所得税の増加するい閉山也ユ救ることとる的り起着セざる自今の千のお業不世村て、北税若円以下こ不得を引円を超過まん税不利也即ち訂正ることを公すん心一税千動記円を納付せさるを得ぬ、都下の詩報するへ追こ拓へ雑きこるもう人数

控

昭和三年分才三種所得金額決定額訂正申請書

訂正額　金壱萬九千百参円
内訳　金六、九〇〇円
金大、九〇〇円
早大 日清 拓大 取締 一、四〇〇円
日清 三、〇〇〇円
拓大取締 二、五〇〇円
金七、八三三円
日清 三、八三三円
拓大取締 四、〇〇〇円
金三、三一五円
金三六五円

査定額　金壱萬式千四百九拾円
内訳
田畑所得　大九〇円
俸給　七、八二〇円
賞与金　一〇、三〇三円
配當金　三、三一五円
雑所得　三六五円

右之通り決定額訂正相成度此段及請求候也

昭和三年三月十六日

東京市牛込区東五軒町三十五番地

東京税務監督局長青木得三殿

市島謙吉

○作業中一寸鉛の活字を交ぜ出版の際春城君に改めらるる筈の意味を表わす為第一個を脱ふ、此等の作業も知らざるもの

日本の文字会の鍾の一式、金二百円也、桐製の
箱入二個あり、この鍾を久しく会の家宝とも
なし来りの手許を経ることもあるべく候
きこの世作りあと好うとなるの注来なるとなる
も多の被損あるものことに雛るるあるあ
らんこの二十数年前来故々のなつかしき
百年後の古物となるべきを見しるものをと
思ふ次第なり。森枝好うとなるものを
偉かな二円を得ひ得ることのできる
ることもあるの一稿をとなすを得べし
佐藤氏と支那鍾のいろ〳〵をそれ中に海外鍾
もあるの如く猿の形のものがいくつとなくあるとの。

標原剣

消光鍾のことは前に書きこと思ひ出でて、
とりく取留の意味で書きつけたと思ふ。
へうのひょうしが猿を形えるとは面白
いまの日本ともに用ある桟を澤ハいまゞ考
ふのハ恐らく支那の猿から来たのであるかと
思はる。

○電話がなる、ラジオが鳴る、電車の音がする。
時計があちこちくいふ。言語の呼鈴が鳴る、隣合
騒がしい世の中で、自分の耳つて市聲
ハ皿の文句に依つて異る。文化の世界の市聲
ハ器々ろ人語や雑音が絶へて機の転る音
が市聲などといふれが、ラジオが盛んになると

種々な人の内容が少しずつ私の帝都の設計裏
切られたかの観もある。実の中で、往々先行機が大地を動かしながらも地下自分の巣穴に潜んでいる。北の静かな時分、深夜人定まる時分、耳を澄ますと、東西の住である。自由の地盤の砂時計、文化世とくべつ外ならぬ。現代の自分の寝室を文化の終末

人を殺すものである。地震の前ラジオが聞こえなくなる。地震の音が聞こえるようになる。時分が為めに殺されることがあるから、砂時計のごとく駆け込み人と時代の進歩とを比べると、今の都市は文化の鎖国制と同じである。砂時計は見習うべきである。

北欧高山の麓の別荘地帯の折、雪深い畑の向こうの狩猟採集の復原村があった、洞穴住居の一部を復原したものである。北人が採集の為に京都を去って法隆寺のような人

である。北人の画が義欵を喪ひ採北と
なつてゐることのかうである
ことを画から似てゐる採山の山の南側に幺を
配した山と北人の山のやうに容易
く改め得るから、北人の心で採北とする
ことの不可なるあることを
要する所である。

○早稲田の亜細亜博物館の模写を試みた
とて五十円力が去もそうである。
前の今見れば拙き材料と乏き自
分にお使かあつたから、一二サジエストした
よもある、強尚私の拙筆乱一文に

模原製

の巻首に収めた伊藤仁斎の墓石を始めの
記から、ある所を採り、今ゆの追善のため
ら、延暦寺（東塔）附の際受戒しの為め
雲海堂から出版し比村上住現為右が断
腸に堪ざるものを感じた一の篇、実に神
居宗旦の日記から豊太閤の風貌を動
こする所を採ることとなつた
の東方を遥かの視く政治家大隈侯も
り西を東西文化の調和を視く政治家大隈侯も
キプリングがある。キは云く

Oh East is East and West is West
and never the twain shall meet...

時代東西南北の二者に決して相逢はず
と、日本をその北の詩人の観察の如きである。
人種的偏見ともみて、彼の詩いの嘲罵をうけて立たれ
ず、由来詩人の偏見が多い、偏見は詩人の一
性格をも云へ得るのかもしれない、一世を風化するの
抱負が大詩人をして此詩人のことと
きい筆者である。大限度の着想が流れた
数等多い。
○江戸時代の都下の史跡として保存すべきもの
ハ何であらうか、その選択の標準次第ではいい
ろ〳〵ある相違をへ、大体江戸城の外廓。浅草蓮葉園（松浦伯の舊邸）本郷六
義園（岩崎男邸）切支丹屋敷（小石川第六天町豊川
氏邸内）馬琴舊宅跡井戸（麹町九段中坂下）向島花
月園（化政頃を中心として畫家文人の集會所）浦田
梅屋敷。本郷對鴎荘（明治大帝の聖蹟）大森貝塚跡
（小林氏邸内）小石川植物園（五代將軍設置の御薬
苑）芝並に上野徳川家靈廟。本郷赤門（前田侯舊邸
正門）外務省内外務屋敷跡（幕末に於ける外交事務
取扱所）華族會館門（島津侯舊屋敷正門）舊芝離宮
跡（紀州侯舊濱屋敷）舊乃木邸（赤坂乃木坂上乃木
將軍屋敷跡）――等、以上。

止まるべし。
○ここには西天候の侯
から今日まで三十数日雨天続で冷気
で実に夏らしくもない。
登る事、勝雪のようなる人間は皆無の
ある。丁度六十一年前の戊辰の年も雨が久

く後いれと支へてゐる上屋の数多き脱落を吟ひ止めようとしてゐる宿中の一隊が橋杭の両露に志めてゐるのを破壊と思ひ込んだ話が現はれてゐる。自分の幼少の頃七歳を過ぎるころ住居をしたが一度未曾有の大水に逢ひ目あつた。北の戌辰と言ふ年が似てゐるといふ事から長く記憶さるべきものであつたかと今の戌辰までもあるやうに思はれる。

○近来風紀の頽廃甚しいものがあつて、女の髪の結ひ様いと軽いことゝ化粧のこと、其の時どかくることの好きなる点の良人の如きは、一つの品位を欠く様のものである。或ハ嘲のものあり或ハ笑ふべきものあつて擬するものもある。

○湖に乗り込んだ戌辰物語を読んだ、大変面白かつた。「漫談的流神奇」といふ者と倣つたものである。ポツ〳〵おかしく記する。

八月二日

○此十年頃支那に次ぐ加奈陀にも時一流の朝野を挙げて「倒のとれのんだ」と称ぢ

江戸の初筆屋に扇の錦の羽衣をつけた
客軽義隊の岡十兵衛は北の錦羽衣を
あしらう取つた法衣と謂つた錦仕立
出た。森中着物で北錦羽衣はかりをとり
取るものがあつた。

坊主が伊勢の太神楽の様に参拝のこと山の
神楽のはうらひで、滑稽の姿でい参拝ま
かりこめといふ、笑ていいとうして参れ
するかといあと、ちやんと扇屋と坊主同

人で、倒のかのくに鉄りろう」と行西文を書い
た。此時のき原い鬼があらかつた

顔役相政い容重の家を得意の新造くや
弱虫とした男である。此男は小指が無
つた、それの若い時分或る花屋で酒を飲くら
その上「踊んく」といふ癖をさわつて小指
をブツリとかきとり、血だらけのまゝ盃洗へ入
れ、その小指の落いたのを洗つて朋輩
へ廻し、「あつー人入が稼出来ます、義
人ありやあうもの」と吹呵をかつた若
ごりである。

のチョン髷がつらか準備されてある。其れをかぶり法衣をぬいで参詣する。其のチョン髷かつらが子供の手習草紙で作つてあつたから驚いたとは永平寺北野貫主の談である

容堂は圖書印を寵しなまいき支那人を招いた。ある時圖をつんで支那の書畫をしたことがある。ある時珍らしいものをやると云はれるので、何んであらうかと支那人が待つてゐると、がちやくと挽いて来たのは人力車で、支那人はこれに乗せられて喝采と試いたが、乗りつけるのは未だ見ない途中で目を廻はして大騒ぎをやつた（同の未亡人談）

明治初年で贋札が盛んに出来た。一人邦人ばかりでなく日本在留の外人もやつた。明治二年八月横濱百三十四番館にゐた米國人[illegible]ルスといふのは、日本の版木師と一所に版木の彫刻を依頼し、出来たが、版木師は振ひ上つて断はるとピストルで威嚇して到頭彫らせた。それが發覚するとロールは香港に逃れたが、遂に逮捕されて又、神戸にゐた伊太利人グリーンは一萬札一萬枚を作つて、フランス人ローグルに出る枚

を止めて笑つたが。ローグルは掬くらんがグリ
ーンは遁こ掬くみあるうち、少女と支那人で井
渓、申口が十両れを偽造し新派と変えた。

四流九年伊国のエドワルド、キヨツ子を招いて、日
本で初めてれを紫しんだ、五月れの表るの銀流を
の国を一回れの表るくの元天の雪をあらつて。
友等民尊のお的の社会と労働者を為
の御仮と一緒をあくのの面白くるのといい
お役もあつたが、キヨツ子はそれをしりそけて、
日本の将来事業を外国要るて、うて労働
しるくちやいけるい と労働神聖説を

力説した。まるで今日の労農ロシヤ
の紙幣をみるやうな切つた意匠であつた。

底の抜けハイカラ連中がバザーを催したのが起
きの前れで大山捨子の娘達が芸子となつて井上侯
が世間を知れて、岩崎善流い貴の出の旅
話を地位ある人の女子が仕事をと
せると眼鏡も光為のよう
な雑誌(五十五)

無沙汰の詫の中まで、空噂の仲直りはかう
もやる茂部といふ噂茶屋がよく叮嚀
やしよ、毎日ぼかんとして空噂を待つてゐ
る仕末でかすると。其の又仲直りの口上がえらく面
倒で一口いひそこなつてもすぐ輪をかけた大騒
きなる人で口上をいふことをてせんべえ」すると
鯉兵さんといふ人がおのやしよと。それと今の白米を
の横丁金傷新宅さんといふお近さ
があつて、よく口上をいつそくれやしよとなる
人が又もう心えた仲直り会に招えうめいこのてし
て仮。その代り空噂等の怪我は一切なしこの近
者の多く持つて行つて、若え者がこんな猫

つまの月かれ傷がうんでえ、もの〳〵大きく
傷のつくやうな空噂をしてまいと」うんで
大きな声で叱んでやうと岡田演大尉（十一年）

維新混沌の際まで断髪をせこらぬもあつて
が受売早く断髪になつたもの茶屋で公
めにこの処其の茶屋の勤めるものゝ待
髪に前髪をそつておくことをすつて
の処。うんでの頭冷仕
仕方」と届けた。免許状仕方冷仕
つておくことを無論仕方冷仕
の頭冷の二字がおもしろい

典力の性一の生存者原胤昭の談のまとめがある。

四人二犬殺の行われる時に上使てのまもあつたが大ていは増上寺御霊屋の辺りで四やつ

九

事北雪奉りかかる典力公二名つの外、獄丼目の麻上下にて出役し、犬殺の囚人の殺すまで、相方の同心がこれをかかる。同心の羽織袴を宝まうと時間つまり夜やる宝ぬから引出して囚獄の石出帯力と牢獄の鍵を受取す。る鐘後、さて牢屋同心が附添つて

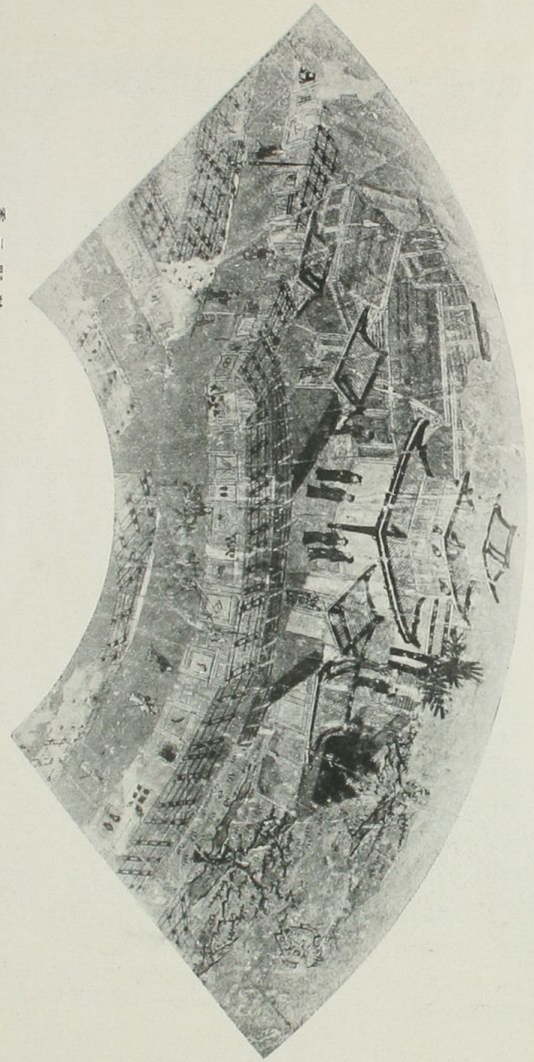
御霊屋のしもく(ら)(ら)て置く、将軍が御霊屋へお詣りなさる、御名代がお待ちを済まされて囚人ハ腰縄ゆみまで、先の次第を申渡かせ、いくらかのる間(綾)をさせ、増上寺の時また文かもそこで脳漏を解き、着りの着るまで、牢屋同心ふたり、髪床が来てみて、傷てある月代七剃つてなる。月代剃の頭への刀の利いた

猿人かるた。宇を出てもある四人の成敗が額
一枚に盛り上つてゐるのだ。前りまくひとの
ぴなつた。

上野の彰義隊輪王寺の宮様が三のおくおく
の時は、おんぶして御薬園
の陽屋佐兵衛ともんかうく雨の
男で、紅葉をんかい粋
帰めれハ下根風まし
三人ハ池屋の主人とのふとうハ
えん。
佐兵衛の事故から
[illegible]

の東京で盛り場と云へい
ば、浅草の観音
と並ぶ、毎の冬を告の美物
なる事に上つても、
でうん譚でもあるが、北の土砂
れをふるひ分け紙代
隅で東京中の銭湯
で一家の生活が出来ること
[illegible]

裏いた。後年之のを
感、冬上野を
かうゐたのだ。佐兵衛ハ
た。

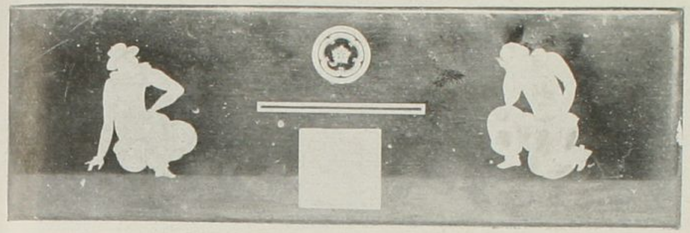


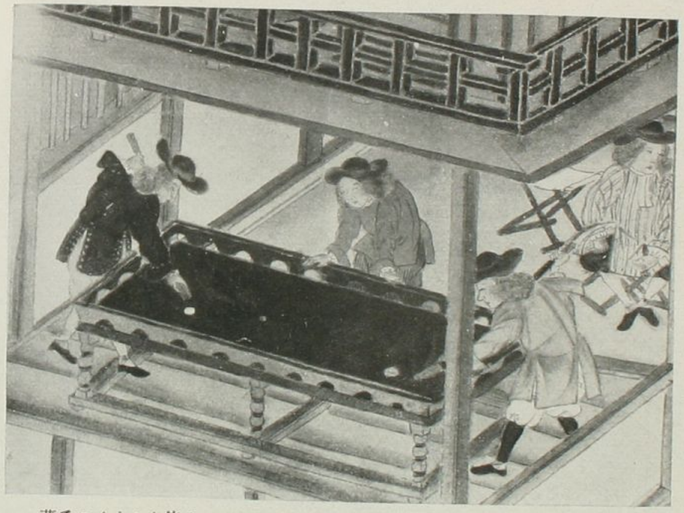
秀元野狩

圖繪（藏氏部太郎見永、國料史藏）寺泉善向

長は、安土の城下に、教會堂

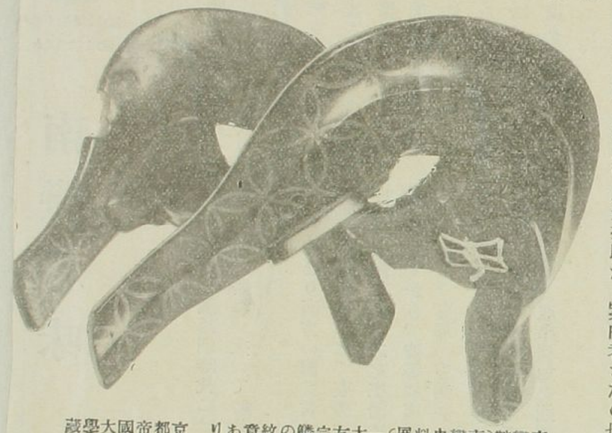
澤山日本へ這入つて來たのであつた





上　南蠻人黒塗箱（南蠻史料展）
下　出島和蘭屋敷（同上）——絵巻の一部

ホルトガル公使カルネイロ氏藏
永見徳太郎氏藏



南蠻鞍（南蠻史料展）——大友宗麟の紋章あり　京都帝國大學藏

記事が変[illegible]。兎に角天文十三年以來、葡萄牙の船は、屢々豊後・大隅・薩摩の沿岸に碇泊し、南蠻貿易が盛に行はれる様になつた。次いで天文十八年には、薩摩の人安次郎（アンジロウ）が、案内者となり切支丹の伴天連で有名なフランシスコ・ザビエルを鹿兒島に伴つて來た。そして藩主島津侯の許可を得大道で切支丹の傳道を始めた。是が日本に於ける最初の布教である。此の切支丹は、漸く此の頃から一方では熱狂的歡迎を受けたが、又一方では甚だしい迫害に耐えて行かねばならなかつた。が彼の宗教は、次第に信者を增して行つた。永祿二年には、京都に南蠻寺が建立されて居た。是が永祿寺と稱せられるのである。此の切支丹が織田信長の庇護を得たと言ふ事も亦面白い事でなければならない。信長は、安土の城下に、教會堂を建てる事を許した。宛も教會堂の出來た日、信長は其の切支丹の殿堂の中に、足を一歩踏み込むと、突然此世ならぬ絶妙な音樂の調を耳にした。非常な驚きに打たれた信長は、其を尋ねると、それはオルガンの響であつたと言ふ話が傳へられて居る。信長は、續いて拜殿に進んで神の像の前に立つて仰ぐと其の神の像は、まるでもの言ひかけるかの様に明瞭と、其の御姿を信長に印象させた。是にも亦信長は、驚異の眼を瞠らざるを得なかつた。今迄の日本の佛像とは、全く異つた深い威嚴と溫い慈愛を投げかけて居る様に見えた。これが今日で言ふ油繪。此の様にして、此の時代には南蠻關係のものが澤山日本へ這入つて來たのであつた。

北の帝大花の歌まんFRCOの四字を於会しお
九段が蒔絵をそうそうみる、即ちフランシスコ
の路なり大友（ヨシタケ）の新く元山九の名である
自分の家をも勤かあるようの南雲人から馬に
騎つて四方みる回が蒔絵をそうそうみる犬が前
回を走つてみる、南雲人が通けた所でもあら
うが、天正あたりの古色をういが、南雲史料
とそうことものと思ふ、赤羽陽養歌の人形の
如きが一枚ある、是れは排悩をそうそうみ
る其の上歌に蜀山人の歌が貼りこんであ
るの引陽の何ことのであるかへ、いつ引やも補
べてそて、合らそうな処が、去かしの画に相南と

まく生来てみる
○支那も大坂を大先生、小坂を小先生とふてみる
よりもおかしく感じそうしかし更らなおかしいの
実生であるが、その実大先生を重んをみるのを
ふのて、小大を分けしれのもある。
○大阪の旧家加島屋二代目広岡久右衛門
友の両家を茶祝くらべをやつて負つ家
勝を制しと伝くる、共茶祝に紅葉鱒
呉竹茶祝とそうてみるそ
の茗香るお杉茶事
先月広島家の主

入札の結果十八萬九千九百圓の高價を出して
春海が落札したと。こんの古伊萬價格のレコード
破りである前年稻葉子爵家の燿変天
目茶碗が十六萬圓の價を出した時の前の
レコードと称したが、これハ赤井比ひるへ名物と
なると言ひどこまで行くか今後
の趨勢もつか如。此茶碗の概要を左のごとくである。

一體該茶碗は如何なるものであるかといふに、それは朝鮮製、卽ち蔚山に於て出來たもので、形狀は高臺廻りに釉藥の剝げたところが在るのが持ち前だといふ。黃色を膝たした代赭色ともいふやうな色調のうちに紅の斑點があり、それが恰も紅葉を見るやうな觀があるものから『紅葉吳器』と呼ばれるに至つたので、それにしても『吳器』とは如何なるところから來たかといふに、それは吳太泊と言ふ陶工の手になつたものから斯く呼ばれるに至つたと言ふことであるが、それは確たる根據があつてのことではないから信憑し難い。それはおそらく吳器卽ち御器で、古に於ける食器の尊稱から由來して傳へられたものだと思ふ。

鎌倉以來、武士道の提唱からそれが虛無恬淡のうち儀禮を兼ねた娛樂ともいふ茶道と結びつけられ、斯道の一大流行を來した戰國時代の如き、戰功の表彰に際し、一國を領するよりも寧ろ片々たる一茶器を所望したといふやうな話を想起すると、今日名器の非常な高價を呼ぶ、また決して故なきことではないのである。

○民政黨の床次が突如脫黨一派のあとの前のである、其の動靜は○文部閣の方針の下に、小選擧區を主張する住友一派、並に床次の北拳を出發する連が策動したとも云ふ、政友會の内部の動搖をやうとも云ふ、政友民政共救派の外交の問題の主なる點は、政權の爭奪を左右し得べしと

考へるのが恐らく今日の脱亜であらうが、床次
八元来容易の如き政治家で、確守する政見があ
るでもなく、今日の進退でも口実のない困つた
田中内閣の対支外交に喜寿をやつとけんでも田
中内閣の外交方針というものが何んであるかと
いふことも、之れと云つて知れおかしなことでもある。
従年二大政党論を説いて身を高政党に寄
せ、今や第三党の先鋒でもあるやうに振舞ふ
であるこれ等の政党が二つともあるやう
ことをいふ事を許さない政党
ないが公正なる第三党の出
現を成り立つ。第三党
横原製

公正なる有志もあることを御承知のこと。床次
一派の政権慾に支配されていることが炯眼
しとが、其の取扱ひを誤つて
其の勢力の少数で且つ
党に梦みる所の脱
党と見ること、山本の如き先達が動かない、政友会の
生命を退退に就て、甚だ
ちんとまるまいあまの
次のあまのと思つてもあるまい
でおまて、政権は本決
退へとう軒宇は出来

ぢう成る行か分らんが、孫の里内洛に殉する住がおかであらう。

八月四日記

○一時出入を差とめた書畫屋が帰参の話とあつて、なか〳〵疎林の雪根先生の聯、蕉の一幅を抱込んで来た、それを前年自分が売主の出し処帳である。出入を差とめたる書畫商の自分よりいろ〳〵の帳を売却することを拒むことが出入の生業なるの以上の代償を拂いそうなことだ、つまり所以であるから此帳を代償の内といよいよおつて来たから、実家に任しおけ、この家売却と画帳の或るのも有てあのうるさい物、之れを売てかけて呉ること、お人と書すること如き風がある。疎林の

書の流れこと画勢である

八月四日記

の羽ぶかき屋うイラン女を催しとれ、自分の脇今も故味の展覧会というあるを催しとれ、自分の脇今もーそうとかしまを一冊に纏めれ、よは其草とふを物えれ。そうは参しの集や崇の次第の文書献を売るく海狗も関する松信一筋表そ書収のてある。

の主ろうと羽鹿屋の四人つきて個抜る展絵今も聞かる。其ひある。自分は巌崇のと

古奉納から手からす忙ましくたらびある。隙
つて歯と洗しての北教のことを見ると他人
りもおもーろく感する。考証ハる頁もある
からまぎ百」説の皇かるいか回を見ておも
ろく見へたこと日だけを左の抱せおく

一歯を殺ハーに高七の絵（正倉院御物
（写生）

一鬼が歯をぬく回（往生要集挿絵）

一江戸時代歯磨売（か祇やす鍋売店

一江戸時代歯磨女（お）廓と老婆

羽衣と本を本を名を持つ女ひ、おんぐろ
の毒を持つ

一江戸時代歯磨売の提灯（一ょお早う
ございます）と私す）五枚の柚子あり式へ六く目の小間
物屋を入れてある小さい

一江戸時代入歯の図（田形の看板中央
に小吸玄入右にそれいーや左に沸入れの
と仮入れの歯を持つ

一幼児初生歯科使用の蒸和釜（今の
歯磨売暖炉の形と似ている）

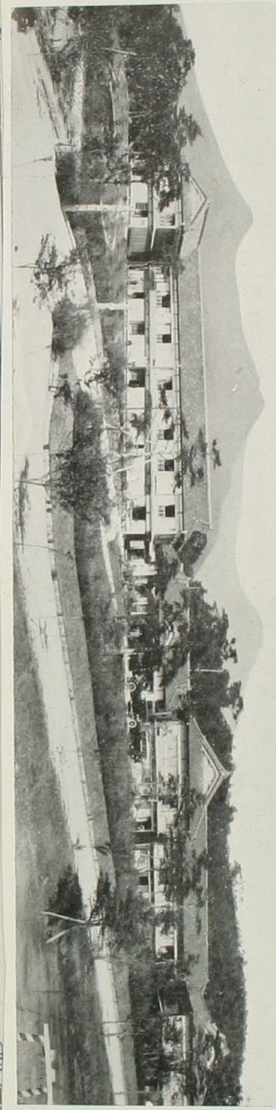
一幼稚時代の初抜き歯

一変り形の口中しらべ

一芸妓生着歯オ（客席の記録

一歯の供養の塔（辛抱塔の下部と
穴を穿つて筒集を封す）

一歯痛の叫いろ〳〵



三 兼六園

乗る九時頃の汽車を聊か無聊を思ひ、八時半頃の
九時半里程で着し、先づ自動車を傭ふ
て四里走る、新那須は近年開ける不良の
道路は極めてよし、北地に御用邸の営まれ
る為め、道路に注意を払れたるもの大
に新那須よりは九る程悪く温泉ありて、浴客の未
だ少なき、自動車の疾走に適する為め、此の
間の景色は近年のこと丈へる。
園の如おはよく北の山里の
道程を人家稀にして柿落葉
を見へる。五十丁の
と呼び、北方も亦の令名の係るとなり、
初夏の大なるもの今尚雪の為に
ある也、東京の気候に似て
夫も温泉は二十七八度の冷気
皆な湯入のドテラを着して
冷気の如き本館浴室
或人と満員の為
八時頃の携帯して
我生石あり、硫黄の
時は乳白色未だ
気は硫気を帯び
八丁程今を帯びる

無病の病人という者も在也
少けり、温泉神社の御用邸の湯も同断と
さい温泉の場所附近まで引湯、孤島の古
巣を捜つて久しく御細工、不悔共の真気は
こ六文の鉱ある鬼神欲と英文の鉱を刻し
ふもあつた。五十年目も此の神主を托しみつ
から治療の日神達と成功ちんことを祈る
為めこの宝の宝祖をを神と棒けたと云ふ
其の石をも未さえとが文人の此事の後
言あると思ふ。此神社を横る折ふと、そこ
教生石の遺跡がある、雲生の一石を因る石
かとのよが、恐る〳〵近く一説ある所以也

標原劇

救生石の早く埋めうれも地下式石室のでる在
りと、或は此の一石、但し此の一石は亜硫酸瓦斯
を噴出のごとく吐き出し、おると云ふて近年発天
物の此の地の埒と入り、恐ろしきもの同じ運命下
を救の人とを後まで宝死し、其の子の両親
塾のとと放食の主人の語つた。危険なる所也
恐を異ふて珠数
こんも金毛九尾の狐、大石あり
之話和ふ最初活力を有するものそ
し、妖狐は更ふ所謂石を以つて此石を砕きとる
を和ふへ元禄鉄槌を以つて打砕きとると
北の土地の人は説く、槌槌にゲンノウの名ある

北和尚と妃まるか、そして北の高僧ハそが妃後
の人なることい軽を容ぬず。亜まるる金毛も
俗の伝説い基一狩物とろしと思つる北の
唐ろい原野下狐のうもうかろしことも起像に難
からず。今も日高全体に気候の然や鹿と捕獲
まるとうけり。狐へかの論

北地い漢々字原野まそ日本流の風景美まハ
乏しいとも云へ得ようが雄大まる大陸的の風景
ハこゝまこを存ずと云ハ酷のまめ、注うまき
原野のゝ方斜の日を遮きることのゝ方ゝ
海抜二千五百尺の高地と風もしめ
さるい漢まそて海を望もかことまそ唐きなり

あらうか、狂井津との北等の駅に於ん数か異つ
てある。北の唐原の一方ま此立ってみる高い山が
那須山狄で、朝日山狄つてみる。那須山狄ハ
る。北等の山ハ左の方ま従ひ
二千五百尺の上ま従ひ
いるので、其の雄偉の風格ハ北の唐原
の風光を一層雷高
一時間ばかりあちこちと観賞し
ハ近頃住宅を如何
し北、北の別荘を近
用邸まること

出てこれるのうち「凡厥庶民、極之數言、是訓
是行、以近天子之言」とい[illegible]が典故である、支
人の為文宛の別荘の前
主と思つて主客のごとく
しとのべ、内容は在荘中、郡須芳の書信が到来
してゐた。

一北吟去が同し旅舎に泊つてゐた
りする話をしたが、
岐阜柏と海洲の大山郁夫の事件の
南谷」を好む人として
を挙げたことを語つたが、
岐三名社がある、
[illegible]

[illegible]

猶、昨夜の白きを繞る、
あり、君の演壇に之れ
み、北の頭を擡いて曰く、
ば、若し知らば真に好
まれる。

一五十嵐の海辺[illegible]
最もちかくは最も
夏合いまで踏入ひ
しば十五日まで
あとの段等がこ
を越へとしてゐる
まま小宴を余の

助手三人皆早大出身にて、伊藤康哉と
いふ人を長とし、西川幸治寺内寿一
氏の住職であることを初めて知つた。寿一
氏は陸軍大将寺内元帥の息子であつたことは云
ふまでもない。

五十嵐氏は常平生の記を録り、山梨の二字に注その解を施して
此地の風俗を説く、酒次余の為めに其
稿を読む、余聴き畢り、任文賞するを
待つのみであるが、五十嵐氏は何故か余が休を得ん
ことを欲し、余日本の古跡を尋ね出でて云
くに若木の下るまで、帰らうと。余は之れを受け後
生畏るべしと云ふ孔子の語を思ひ出して
すゝめるのを味ふこと為すこと五十嵐氏

ます、君の文のごとくあんこうと訪ひかけ
容の到るまで任かす。所謂これ余が休を得ん
とする所以也と五十嵐氏曰く成るほど然り
ぬと筆を投ぜり。是に於て終日の談笑を斯く
べかうしたと。

五十嵐さきに「国境の憂愁」を著はす今
次帰郷するに独り四境の美に言及す
ることなきは、余日本の古跡を尋ね出でて云
くに若木の下るまで、帰らうと。余は之れを受け後
生畏るべしと云ふ孔子の語を思ひ出して
すゝめるのを味ふこと為すこと五十嵐氏

○地誌を通読し、来書(傑作)にて口吟す
今次の旅行行事中お馬御風の随筆「草苑」を納む、汽車中無聊を慰すため半の頃駅ごとの文章をあらましと雖ども、感すること、各地と御風郷曲の事為ち御風の如きは今く異例とす、御風都つを去つて郷里に住する既に十年、その文章の思枯淡とろうの多く郷曲の人の注意を惹かざるも彼んの筆を放つものあり、余ハ文章

標原製

御風と郷里と郷里と望む、一郷二人ありて
も郷里を愛し郷土文学のまろうを望むを得ぬ
ことし戊辰の年偶ま有志の会
又六十一年前の戊辰を顧み、去る当階
が徳川氏と勤王軍との激戦をなしたることを思ひ出でて、感慨を禁じ得ざる
ものあり。徳川時代各藩の諸侯
ハ皆な各城を有したが、実地城を戦闘
の用ひたものハ実にあるのみなるか、今
も之を残すを無いやうな思ふ、去つ

八言ニ戊辰ノ戦ヲ今津ノ前衛戦ト
称スルヨシアル。順逆ノ論ハ別トシテ其
ノ挙ヲ壮トセサルヲ得ス、順逆ノ論
ハ既ニ軍門ニ降リ、今ハ全
津山藩主ノ弟ノ世ガ秩父家ヲ嗣ケル
トシテアル。古ヨリ北史ト
詰ハ古城ノ址アルノミ、今ハ全ク廃絶シテ
石垣ノ石一ツナシ、今ノ町ニ旧
城址ヲ尋ヌルモ由ナキニアラスト雖モ
ソノ址ヲ知ル者ハ誰カ北史ヲ知ル
ノミ、数十年ヲ経テ
ソノ記、自分ハ長ク追カケ没ケレ
公今亜ノ淡陽ニ

務めあるまいかといふ自分が公金の流用に
まつたく素人に似けれど面白ひである。

○今日はこゝろあるきゝて、アザレといふ店へ
入り西洋菓子を買ふ、瑞西木彫の三羽二個を
得、一は戦の鉄を刻して
歳の梦を吟ずる侍姿あるまで頭部両手
もまた木彫こゝ、余かつて北花のコレクションして
又一品をかゝの他いくらの類を所く当ま
てクラツカーとう、日本の釘抜のかき数向で
も抜を開き、口のうちこゝを美
入れ、お股を緊押まれが所けるも、こゝ

横原蔵

い頭部と帽子を載ける美人を彫刻
し、お股を開けば口を開き、口を閉つるやうなるおる。こゝ木彫
瑞西北花のこゝを思ひ出すまでを得ぬ。今日のお
土産西洋骨董とおもしろ味を追し、
ハ勝ひ入る、こゝ即ち美一也、アザレといふ店
ハ営つて西家古抜の妻ひうしこゝ離れの
後開店しなるこゝ花葉ハ仕立屋まで侍ら
侍側其他のものを売
子洋装こゝ女を中心
り、古抜が北の婦人と話しくる三状を博る
この北店と回風と実の其日せぬ長ねと初を

婦人ことのみ、余も
上の品ハ経者所好ならん、モダルン、オルドと読解
すべき莫れ
○本文行間二三名家の書込あり、殿刻のある
も、碑人の墓誌を稀なれハこゝに収め
おく

○風呂の研究をなしつゝある中相互に各自の帯ゝ土佐家画風俗屏風の写十二枚内一枚欠）を示さる、十二枚の内未の三枚ありと風呂に関係あり、風呂の図風呂の図にて、浴客の外と僅うち前を覆ひる二三の湯女あり、一人浴客の頭髪を洗ひつゝあり尚ほ洗ひ終えて酒を飲みつゝある所あり、杯盤も亦あり銚子も描かれ湯女のておを折おゝ着もあるを描き、傍らに長きこゝあり、傍らおをつけ居る二人の女婦を描き、女郎屋の風俗なるべし、接吻の図もあり、抱擁せるさま、此の図に於ては、女の髪容のさまざまなるを見ると云へり

標準製図

ことなり、如何なる今の洋風のものも趣あるべし

○風俗画報、女髪考共他、日本のこんまひの人が、あるいは図を含んで深んでる一種のもの也、研究家は此図を宜敷味ふべしあるべきも、なんぞ未だ憲法を図にしたる者きものあらざるや、罪し寛仮らるも七風いろ〳〵あんなもの。風俗稀也、洗場を酒を飲みつゝある図いこれを描きたるを見る初めて見る中相の所也、三北の画ものゝ林荒村の所也と云へり、余も亦然りと思ひけり（八月十二日記）

○温泉場にありて觸れなる言門語あれども、高旅湯
泉にのみあることなれば或は知らざるものもあらん 一一
浴客に號令する湯長（ゆちやう）なるものありて
入浴時間の長短を計り、時々入浴せし
めさるが此湯長の任務也、常は又湯の温度を調
節する為め壮丁が板枝の如きものを以て熱湯を
攪擾するを常とし、これを湯揉といふてゐ
る、那須の湯本にハ現にこれあり、今伊香保
に到りてもあらん、那須にてのみ湯にハ湯
もみ唄といふあり、直年作りたる歌を覚えしけ
れハ録せず、我れハ昔し湯女の唄ひたる歌を
知らんと雖まれども未だ知らず、惑を増ひ

なるものハあれども、湯に關することの傳はらざるの
○錫茶屋ハ新湯に於て昔しの割烹店なるが其
のまへ茶屋と呼ぶはむかしハ湯治のものなりと
去ると新湯にて呼びけり、最初どぜう錫を標榜
して営業の頃、あるものを誤りたることある折節
を書かんことを請ひしに其人草書にて錫の
ますます書どぜう錫と書くべきを先づ錫の
字を書き終るに當惑し看板のケヅリ直
しを求めたるが主人けつしく不吉といふて應せ
ざりしかば三十四茶屋の二字を書き添へ
たるが今日の名ある所以なるが余の少年時代
ハ土鍋錫を用ふ女中もたし觀模のものなり

○早大の出版部で中学の教科書を出版せんとして編纂
に努力中と聞いたことは遺憾の外に教師用の解
説を作ることである。今では習慣ともなつて、解
説が添はねばどこの学校でも採用してくれぬといふが
實際であるが、一冊の読本に一冊の解説書を作
ることは一方ならぬ骨の折れることでもあり、又少なか
らぬ経費を要することである。これを全く教師
の為めにするのであるが、賣ることの出来ないものであ
るから多くの部数を印刷する必要もなく、僅
かばかりのものを作るのであるから割合に費用
がかゝる。全体教科書に手引を要するや否や
ハ既に異論もあるが、一冊の教科書に一冊の手
引を作るなどは寧ろ過ぎたことでもあるまいか。固
文などの教科書は決してむつかしいものではない。
之れを教へるほどの能力が無くて教員となつ
てゐるものは無い。勿論教科書の編者
が一文を撰むにも深く思ふところがある、其の思ひ
くは編者でなければ知り得ぬこともあるか
ら、之れ等の事をも記して置くは必要でもあら
う。誤解し易いことを注するなども必要であ
らうが、どの文章までも噛んで含めるやうな
字義の講釈までもしてやるのは、寧ろ教
員に對して侮辱でもあるまいか。一冊の教科書
の動もすると、之れらの字数の多いキーを附

まるでい（白猫如用ともいう）ありの数の用をもいう。転じる（周辺まる）くる。十冊の数千書に一冊のキリがつくこと。転じて依怙贔屓もキライ頼るやうな（ひいき）ことをいう。（ひいき）ありまして採用しないこと。教科書を心ることの出来方が本当ありそう。実際文部省の命ずるまま、教員の採用を得るところの多くは、教員の非ず拘らず、面倒やあ費を厭て辞さるいけれども、実の研習を保存助長するのとて不平等の改善を企図しかい自分の珠に右腐まもみするものの七掛こそ（ひいき）ありまして減ず。まるで生ける
標準型

ぬと感じとの人分の卵級行であった。僅こと一日位不つおるきまるいのに、忙つてくると、都合つかのて或人と話が家族に非し千里ある住てあつた日を経ひ過ぎ田植ぐまでも済ぬが、新くまで延ばす地ハ老躯に鞭ち繁忙すること、ありまして新卵級行二千五百人住を突破する大盛況であるとの事ありても、それを身体に影響あるべしとも思ハざるらし。那須地方で七日掛てあるとおもいのハ危険であると感じたのハ元湯のあるそうの硫気で実な

いやな感じがする。今一つ不愉快なのは、浴
場で、冷水に頭部を洗つた事、其のが私の
一つの病の、頭部と疾病を感じ二時ハ
何か病を罹つたのでハあるまいかと、ひそかに気
をつけた事である。先頃氣温の高い日から
急に秋の気候となつた。先頃より八月十三日迄し
淡びある。昔し登山を趣味として元行校に勤
九自分も亦不合ひが別して元行校に勤
ることもあり設合わせあるも断念した
である。

○ 高山秋帆の遺印一顆購入る。佐城蓄堂の
もの也。画面に蓋をなす

橋原蔵

名家私印容易に手に入らず、久し振名家印
二顆を加へ得たり

八月十三日録

林支那文明
橋畑

○今の霧雲も(コロタイプに附したる)元藥
三冊志を獲たり、此原を余の久しく求めき
未だ見ざる所、北原白秋の新全集三冊
志平氏と巻首に記事あるものなり上中
下三冊本也、版式輪廓内十尺竪四寸五
分横三寸各紙製題額に挿書あり一頁二
十行極めて細字、書体宋に似て至治新刊と

橋原蔵

耶蘇興廢年表　完

暑中御伺申上候

高堂益々御清適之段奉大賀候毎々御引立を蒙り雑有厚く
御禮申上候
此度つまらぬものに候へ共麟刻いたし候まゝ御笑覧に入
れ申候

中尾松泉堂敬白

昭和三年八月一日
麟刻　中尾松泉堂

耶穌興廢年表

享祿三庚寅菊人商舩九艘来豊後府内請五市獻大友義鎮鐵銃二其所望
在弘教法
天文十年辛丑一艘来豊後神宮浦載伴天連
十二癸卯六艘来豊後府内其一泊薩摩多禰島
十三甲辰復載銃工来泊大隅熊浦
十五丙午載莫臥爾人来泊豊後佐伯浦
十七戊申載諳厄利亞人泊豊前八屋浦其徒六人投化
二十辛亥載咬噜吧人泊豊後府内時伴天連此ニ教師ト譯ス烏而葦莫衆義鎮召見テ

大喜其徒曰伊留滿(イルマン)
弘治三丁巳載伴天連(バテレン)来泊肥前唐津
永禄七甲子葡舶来五島
八　乙丑葡船(ポルトガル)来平戸載伴天連
十　丁卯葡舶来天草
十一戊辰葡舶来(ポルトガル)肥(ヒ)伊雑賀(サイガ)載伴天連
元亀元庚午葡人(ポルトガル)載伴天連来肥前深江(フカエ)今長崎是也
二　辛未年大村理(オオムラヨシ)專開互市場於深江伴天連毀寺院造天主堂凡十一宇
三　壬申葡人(ポルトガル)及呉人(ポルトガル)載伴天連(バテレン)矢養(シヤヒル)虚夜而来豊後府内及弟子数人投化造天主堂

天正元癸酉葡人載伴天連吉(キヘイト)盃伊多落(イトロ)来府内
二　甲戌織田信長名見伴天連烏(ウルカム)而薦莫造天主堂曰南蠻寺時伴天連勿羅(フラ)
天木(テンノケリカ)計里哥里也(リヤ)利伊思等貴深無数又曾(レン)連来思至自肥前哥(カ)勿寺(ヘム)水(シトン)
矢多母至自和泉
三　乙亥葡人来豊後臼杵亦載伴天連
八　庚辰葵人来肥前平戸亦載伴天連
九　辛巳葡人載伴天連天利(テリヨリヤス)寿(ス)利也思伊思来入京師抵安土
十二甲申植田玄佐抵雞(イタリア)馬不還
十三乙酉伊留(イルマン)満波皮(バビアン)安莫與白翁論法波皮安莫織口事聞秀吉議廢南蠻寺
十四丙戌葡人来肥前大村載伴天連

十五丁亥秀吉禁天教燒南蠻寺
文祿三甲午捕伴天連六人其當三十餘人送之長崎處斬
三　乙未京師諸寺請官禁耶穌
慶長元丙申西洋舶漂著土佐葛城浦
三　戊辰淨土僧玄故惡天教入長崎教導入心悦服玄故号聖寮住杭後菩導寺
五　庚子阿蘭陀諳厄利亞來和泉堺浦請五市送之江戶其名曰也莫王烏思
諳厄人名曰安竟失羅遂投化
六　辛丑板倉勝重與大久保忠隣相謀縛耶穌餘徒悉諸蒙包捨河磧世謂
之轉族
七　壬寅安南呂宋柬浦塞交趾太泥諸國入貢

八　癸卯葡人來長崎
九　甲辰一向僧道智抵長崎闢邪教創一寺曰正覺寺
十　乙巳嶋原城主有馬氏發使廣南漂到阿媽港與葡人有隙
十三丁未蘭人來肥前平戶
十四己酉有馬晴信燒阿媽港舶一
十六辛亥嚴禁耶穌南禪寺崇傳幸喻其旨是歲流有馬晴信于甲斐使淨
土僧靈岳誘喻耶穌教徒
十七壬子英人及是班呀人來平戶
十八癸丑磔大久保藤十郎拏戮其族
十九甲寅遷有馬尚純封于向捕高山右近內藤如安加賀山隼人李友祥放吠

嚩吧如安放阿媽港

元和元乙卯禪僧一庶排耶蘇于長崎創立一寺曰皓臺寺

三　丁巳誅眾浦常陳賜衆書于阿蘭陀甲必丹法或連伊烏伏六法而

浄土僧傳譽入長崎闢耶蘇會尹長谷川氏叛立一寺曰大音寺

日蓮徒日惠者抵長崎闢耶蘇爲叛一宇曰本蓮寺

七　辛酉英人絆立市

浄土宗僧信譽在長崎與傳譽戰力斥邪徒創法泉寺

傳譽著書曰破邪顯正記長谷川氏嘉其志爲創一寺曰三寶寺

寛永元甲子是班呀人來官斥之

七　庚午定繪踏法海外傳爲美談

八　辛未捕伴天連徒于筑前大島

十一甲戌捕明石掃部及男十次郎祿之又捕邪徒數十人倒懸于品川海濱潮

汐浸之觀者戰慄

十二乙亥停外國通商

十四丁丑薩摩獲葡船輸之長崎下獄島原賊作乱

十五戊寅嶋原賊衆被誅者前後凡二十八万人餘云

十六己卯停外國船碇

正徳四甲午南蠻人來數却之

寶永五戊子羅馬國人譽禁來薩州種島囚送之江戸新井白石禮接請聞天

敎且許互市不允白石著西洋紀聞采覽異言

文化元甲子曾西亜使節来長崎
五年戊辰英船擾乱長崎
文政元戊寅英船来浦賀
弘化二乙巳米船来浦賀伯理(ルリ)令耶蘇教師説教法
安政五戊午亜米利加和蘭陀英吉利魯西亜佛蘭西條約成(テ)交絵(エフミ)踏法但
禁五年宗門

慶應元年乙丑三月刻之

正泉寺藏版

所不来也。中尾松泉重寶復刻領布すと
あ。

○東江源雖の字一帖を獲たり松本子善門品一帖を獲たり源雖の傑心といふをいふべし
昭和八年七月字とあり源雖にあらず

昔人好古玩新写残篇靡於法帖中
吾邦古名蹟流布必待世為余嵐
蝸月書遺数行再来不必尽之
年當暑養益齋
奚疑十九息来今日雨後
白木小平郎
活不杉平

北霞楽翁人よ
多の京都の於て

寫羅展讀一過因題　東江源鱗

余毎以小楷法樂毅論此種同字體と
間參取黄庭曹娥畫贊及宣示戎
路力命薦季直表而倣其様觀
者或謂之集古字豈敢[illegible]　但愧
工力未精況其古人遠矣　展卷太息
鱗再識

善源鱗潤長の筆と推せらる　八月十四日記

〇昨覧刊の新[illegible]に余の筆[illegible]出づるの　八月十四日

めし

「春城筆語」出づ
記者

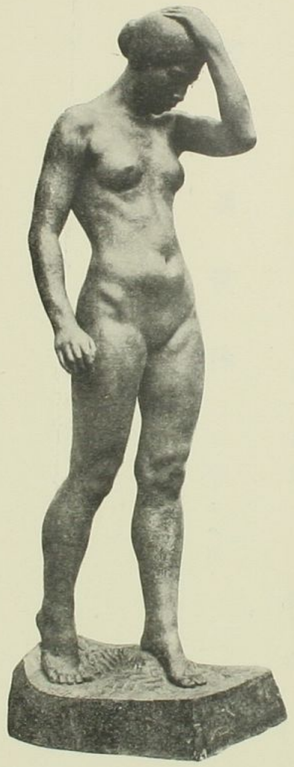
趣旨

三代の江戸兒は神田にも少しこいふを、木内君の家は三代の江戸兒にして、且つめざましき木工なり。祖父喜八翁は名人として世に聞えたる人、父半古翁も其技をさ〳〵岳父に劣らず、こもに內府の命をうけて正倉院の秘寶を修理し、父子ともに夙に其名を帝國美術略史に留めたり。そも〳〵我が國の工藝家は、世々その業を以て家を成すもの少しこいふにあらざるも、家傳師承を尚ぶのあまり、やゝもすれば意匠は陳套に、趣味は偏狹に、技術も次第に纖弱に陷らんこすることこ往々にしてこれあり。しかるに半古翁の達眼こゝにみるこころありしか、五郎君を東京美術學校に送り、專ら西洋流の彫塑を學ばしめられしに、在學五年の間、成績常に濟輩を拔き、卒業の作品は校內に保存せられ、其後連年帝展に入選し、最も有望を以て目されつゝあり。しかるに今此力量を以てまた父祖の遺業に復し、試に調度器物の製作を以て世に頒たんこす。おもふに君がうけ來りし血統こ家傳こ修練こは今より後君が心頭の熱爐に渾熟して、この昭和の民心に適恰なる新工藝品を顯出し、新時代の家庭のために豐富創新なる情味を提供し來るべきなり。今にしておもへば、君の父祖が其の半生の精力をその修理復原に傾けたる秘府の御物の如きも、世人多くは徒に千古の骨董こして尊重するも、其本質、その趣味、その材題に於て、もこより中亞西歐の色調最も強烈なるものなれば、木內の家君を出すここ故ありこいふべく、君出でゝ木內の家後ありこいふべきなり。我等君が平素を知り、今此擧を聞き忻快に堪へず、ますます君の前途に嘱望して世上の同好に推薦せんこするもの也。

昭和三年八月

發起人（イロハ順）

市島春城　高田早苗
會津八一　正木直彦
高邨光雲　平沼淑郎
建畠大夢



帝國美術院第八回美術展覽會出品
歩む影（彫塑）

○故後藤男の為の銅像を建つるの資金を募る。余抵抗の地北海道に在りて敢て発起人たるに躊躇せざるは、全く君と故郷を同うするの縁あるが為のみ。

昭和三年八月十四日

上杉謙信公軍裝騎馬銅像畧按

（明治大帝銅像謹作者）

渡邊長男先生畧考

說明

高サ　參丈五尺（總高サ臺石共）

『御像甲ヨリ馬蹄迄デ高サ　壹丈五尺』

『長サ　壹丈五尺』『巾七尺』

『臺石高サ　貳丈』『外柵拾間四方』

（本圖ハ謙信公ガ覆面靑竹ヲ取リテ軍兵ヲ指揮セル英姿ナリ尙ホ斯界ニ於ケル大家ノ意見ヲ徵シ史實ヲ考證シ大英雄ノ面目ヲ躍如セシメ萬代ニ傳ヘテ遺憾ナキヲ期セントス）

○昨○未拙書二十八枚成る内扇数八枚餘
おこし、大部分を脱稿す
あゝ、詩美色紙の如きもの
多くハ揮毫、形大なること
得さる也、大抵其人見心と云まるの詩或ハ
句を題ハさる可らず、余の癖ハし洛と
洛を弄ハさる事を記せり、往々之れが為め
困しむ、揮毫ハ簡明二当惨憺ト似て実ハ
神を労すること大也、昨日二十四字を書し
て全く疲る、此多作涼地に居る那須人の為めに吟詠
する也」風氣清古い苔

ゟう我ゟ伝印刷会社の為めにうつすもの
由、即大敬曰く弘文
実曰協力共存
ハ社の同人ゟ番して可也
○坂間ニエチー、ゆ
ホーエル、ゲーテー、ゲルハルト
猶ハ多ゟ、ゲルハルト
ゟを憶ハ出す、北人物
り我人を打ゟす、北人物
忽ち一人ゟ打を曳ゟす、感
毛のコートを着け
つゝ、衣服ハコートに同じ、

報曰く午前就
北内何れかを取ゟ取者
八月十四日驛有中
ワグチル、シミペン
四等の肖像ハかきことを
壮ゟし、ゲーテーの
感ゟ日郊外ゟ神社悪所ゟ係
未ゟことを見ゟ、女人未
ちゟもの○ワボンを
風采ゟ未異ゟゟ

ゲーテー之人を怪み、初めて理性動き共の
錯覚なることを知る。こえんも彼れの神経
病深く食もといふ

○初代廣重の墓、浅草北松山町正玄寺にあり、其の墓は紀念碑を立てることなく帝
展の日を書き春を
廿四日の法名を刻せり北神奈川十六番
さ五尺碑銘の廣重の二字は北斎翁の自
筆を模大して彫り、台石の両側に版木を彫とりて
居こ墨水四こんと直筆の辞世
を残して死の床に

東京市

画の師匠の名所を見な
の如きを、両側り人五十三次の内日本橋と京
士川酒匂」との版画、風景画扇、扇まで多い此意
を銅版でおこす又、風の表つにしろ
九二説もしろ。

○芸談が成るようでかんじん
寸二成せやうとうたあちこ
ちの方やと自
分の体も出て
みる。載もい載
もとれ後の方体
八分と交りかあ

[illegible]

の用をいふに初めを守ること所なり

日本酒を芳香人昔しは十分の用ひも酒也弥候は近年十分の給ぐるを取て給ふ

銘のく用ひる酒

日本酒を私用く招帰るの影し、おもの徳姓の時人用るのは来い平産するとぞ故に臨月より之を用るよ

○三亜多南半島部有井村羽市本西村徳大夫ら共不在の山陽に家ありかあるの肖葉亜の字を二枚を切り来る余が陰事山陽媒妁を約束に人をそつて去吉祥肖葉

の字をかさる、余永の肖葉を許すし其の如く豊富を多く生ずるものとふの字をかれを思ふ。余西村とやうな二方三方ともし掘り山陽を改版の時之れを加へるの余り美りとなる余の初こよる也く、此の字をいの或いは文ちんことを雪んでここを収めおく、飯白を注しなるいは文を肖葉亜の字をいの首画に記しなるを重複等一ども也

八月十八日録

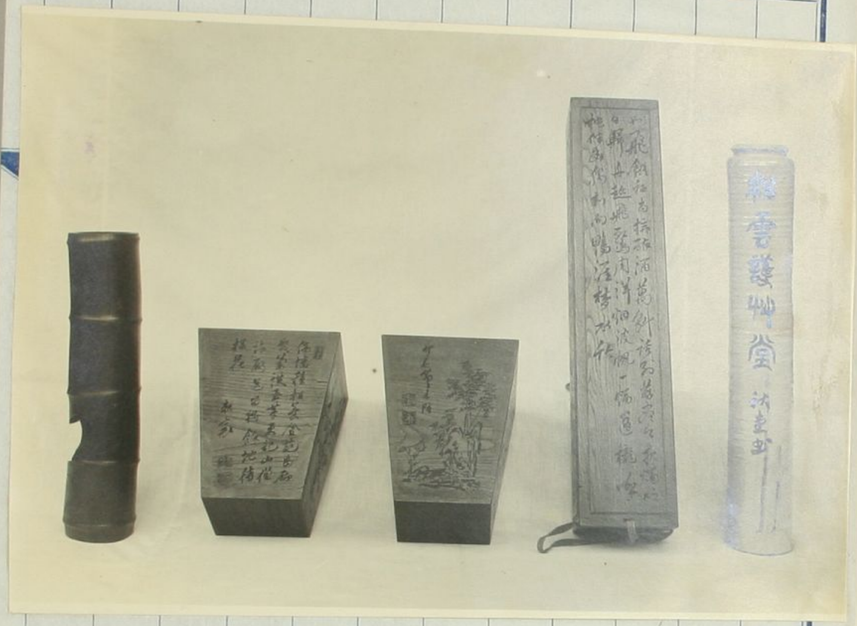
柱聯　二枚

掛子　山陽銘
吾心似秋月

扇面額　横枚
山陽外史
為井潤山人

枕經册
采菊山陽の
家庭を詠め
る歌

手提硯箱
三抽子机
西面蓋
裏ニ
山陽自畫
讃
楳點梨枝
和歌



陶器花瓶　秋堂山陽
二幅ノ内

右花瓶箱
四面山陽詩
刻

釣瓶　一対
山陽二面二詩
アリ外石半江
景文竹洞画合
心

二重切　山陽米田
合心

模倣厳禁

一、硯　秋史先生銘　研屏　梘製　銘友竹屏
　手提印箱
　下硯
一、硯　倣古形硯背ニ梅山陽ヨリ贈ラレシ硯ノ銘ヲ書ス

一、墨台　銘　墨華石
一、筆架　銘　水竹翁
　箕面　栗山詩山陽ヨリ贈

一、筆筒　雲那山形　青山陽自刀
一、筆硯　梘製　銘水竹仙
　未研　銘　愛友人　墨心紙禄ノ助ノ印

上段
茶入 木米 木泥画山陽詩
一、香盒 楓葉 木田画山陽詩
一、菓子盆 木米 五枚
山陽詩刻
煎茶に依木米山陽に好るもの
下段
角菓盆 山陽詩
中 三 四上
一、小菓盆 四上 木田四君子
茶托 木米 五枚 山陽詩
莫茶三ツ盆
山陽詩 海仙画
一、小菓盆
木田詩山陽画 [redacted]製

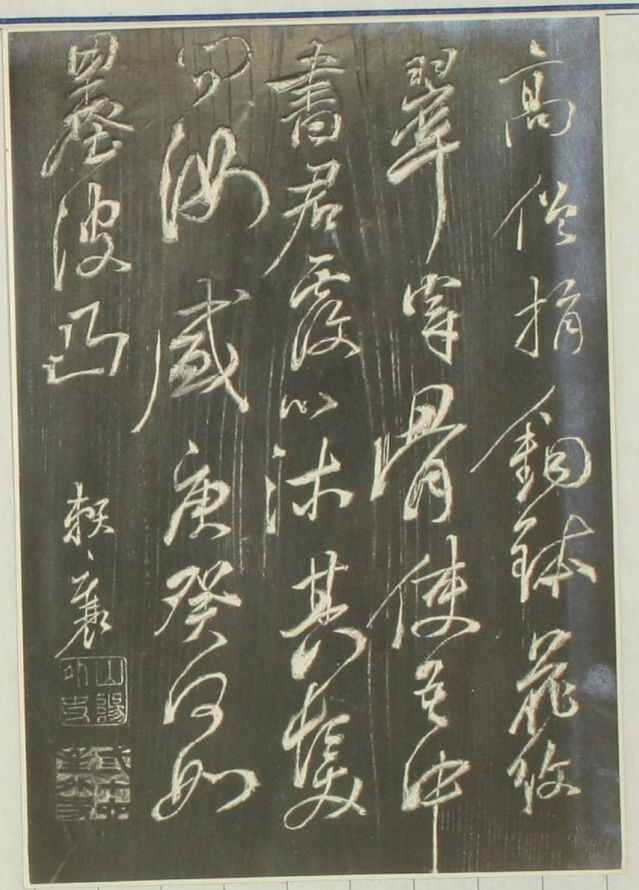
菓子雪山蓋 木田画
山陽詩
表四面に木米春琴
文晁蜀山等詩
画之
九寸片 菊苞公短冊
重箱 山陽詩
北窓為一画
蒔絵野菜南
菜なり山陽に
下駄のうら錦織
山陽詩
菜皿 手提菓盆
外右蓋 木米梅月の詩
(山陽刻) 大入 山陽詩刻
吐月峯 (木田画)

如意 招松堂山陽刻

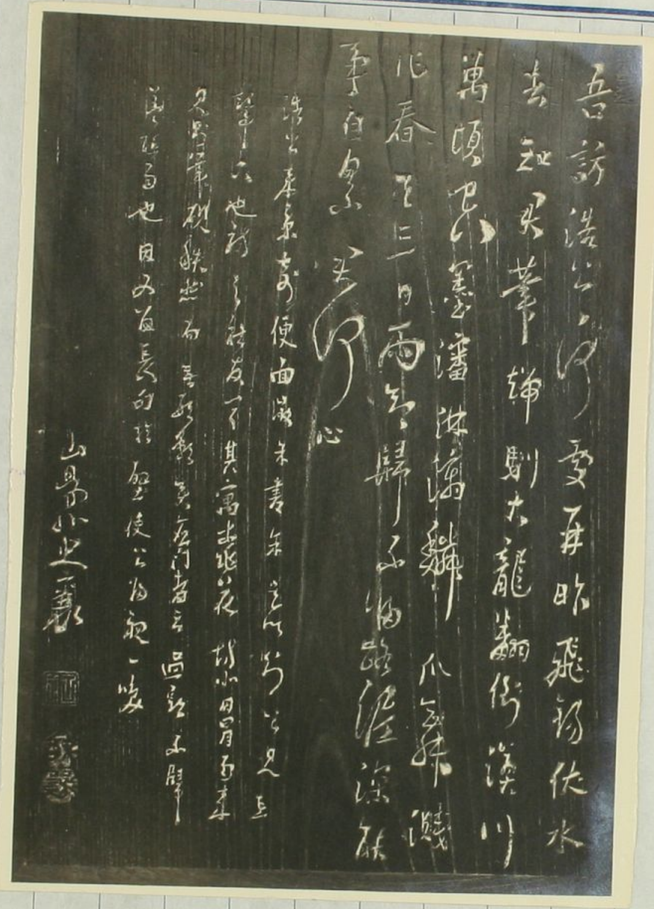
香盒 拟紫
井田春琴作
雪華山陽合作

香炉 山陽好来

香炉 银井井作
铭家定纹
香气清揆 白山陽刻



吳郡の戸山陽點



同上

○お子さんが蚕をたくさん飼いたいと、父の仕事のある文枝のところへ、娘と一緒をよく訪ねて来る時も蚕の支枝のあるものは決して買わぬ。娘もまた一緒に働いて蚕が一足でもあるとうれしそうである文枝のある夜おい、おつうさんを呼んで蚕を譲ってくれと言いつけた。お子の家庭は蚕の桑を買えば家に育ち桑を仕込むこともあるから、蚕を売ることはあまりまれである、また仕事の都合が別に聞きこんでくるものからこともあるので、文枝と打ち合わせた上で、その譲り時日等をつけ、自分も娘と一緒に家を掃除して庭を取って庭を掃いたりするなどいろいろの樹木を挟んで、若い蚕がいろいろの色が未だ葉をメチャクチャに食って父の蚕の生育を妨げぬ、初めの内の気をつけて一箱の中から、蚕をのぞいて生ずる病気の種が裸根、蚕の若い葉を投げ込んでやらないようにして注意をしてみること、黄色の蚕が毎日の脱皮をしてみること、果してこれらの白の蚕は日ごとに死んでゆくのであった。黄うみのようなものであるから、実に見としてゐるものである。農家は桑の大敵の蚕であります。自分の七お子さんと同じて大自分の手を妨げぬ蜘蛛である、蜘蛛田の

身を蝕ふと云ふの、蜘蛛を蝕ふのである。
舊軒や窓や樹木などの蜘蛛の住るのへきたなくしても、どうしても押入の置けぬ、樹木のこんもりしてゐる所くうつかり這入ると頭から口の中へ蜘蛛の網の実に厄介な氣がする、毎朝起きる早々箒を持つて蜘蛛を掃ふことが習慣となつてゐる。古かし蜘蛛もの本体を殺すことをもせない為めに、翌朝のそこへ同じ網が張つてある。蜘蛛もそこへ氣根のよいものであると感ずると共に懲りることを知らない奴だと思へさせるを得ぬ。併し時々蜘蛛も掃ひまさうな苦辛して張る

網をお壊すのも無慙だと感ずることもある。蜘蛛の網を張るは実に苦心を拂ふことを思ふと、無闇と其網を壊すべきでもないが、私の嫌ひな蜘蛛に限つてやらうのであるから、寧ろ捕獲すべきである。人間のエゴイズムである。

○自分の日々磨る一勿の墨が盡きた。四分をばかりまだ殘つてゐるが、最早此仕用も出ない。此の墨の形等の秋鳩岳堂製で、長さ五寸五分ばかりで、厚さ五分ばかりで、上等のものであつたが、

本邦の主なる山脈と秀峰

山脈	秀峰	高サ m
樺太北樺太	山トー	1040
樺太東西	戸バーマイ	1250
北海道石狩	岳リ	1885
北海道日高	狩シロ	1950
北海道夕張	山岳	1984
北海道振	千軒	1128
北海道上川	峯根	1914
北海道石狩	池ケ	1440
北海道日高	早和大	1193
北海道十勝	大清	1171
北海道北見	駒	383
北海道天塩	蛭	2132
北海道後志	金	1673
北海道後志	黒	2595
北海道後志	金	1792
北海道後志	白	1173
北海道後志	駒	3192
北海道後志	錦	2956
北海道後志	實	3180
北海道後志	笙	469
北海道後志	伊	860
北海道後志	御	1377
北海道後志	後	1209
北海道後志	澤	
北海道後志	東	
北海道後志	坂	
北海道後志	渡	
北海道後志	石	
北海道後志	冒	
北海道後志	彊	
北海道後志	登	
北海道後志	老	
北海道後志	吹	
北海道後志	鹿	
北海道後志	越	
北海道後志	丹	
北海道後志	關	
北海道後志	御	
北海道後志	佐	
北海道後志	赤	
北海道後志	木	
北海道後志	飛	
北海道後志	能	
北海道後志	養	
北海道後志	伊	
北海道後志	鈴	

山脈	秀峰	高サ m
和泉	山獄	1249
和泉	見ケ	1214
和泉	奈經	1915
和泉	高剛	1112
和泉	武城	857
和泉	佛ノ	1610
和泉	金鶏	633
和泉	葛氷	1043
和泉	諭大	1955
和泉	劔石	1981
和泉	三東	1233
和泉	母	1758
和泉	浦ノ	1935
和泉	振藏	1055
和泉	空立	606
和泉	頭	643
和泉	矢	2744
和泉	白雪	1708
和泉	留	1915
和泉	狼	2013
和泉	妙	1229
和泉	十新	1044
和泉		3962

○こゝ一雨天つゞきし事人と異氣を覚へ去らんとすれども、雨も亦錦囊の一方便と聊か詠みを錄せんも無んば詩味索然たらん。雨の詩人の好資藉りて花弁の風趣を示す、曰く一雨春疎花雨後、曰く一雨春濃一江花雨と云ひ、曰く一雨春霖無数落、曰く一雨春濃一江花雨と云ひ、曰く一雨春霖無数落を葬りて其趣を云ひ、曰く一雨春疎花雨後、曰く一雨春濃一江花雨と云ひ、曰く一雨春霖無数落を葬りて花の風情をあらはすもの多し。詩趣横溢す。或は桜花の風情をあらはすもの多し。詩趣横溢す。或は桜花の風情をあらはすもの多し。詩趣横溢す。或は桜花

死体を埋葬しようとすると、異服高帽後尾も
焼失しようとする、彼の北の高家の裏庭
を掘り、人夫四人を
を一例とする
彼の北条府の内通、
外人の忌む針、沈
り
ツーフの日本を去る間
併せ、ベタビヤも英
支仮果として英船の
下を英船と捕
英船を焼くべく来航するもの

船の順風を得て去ろうとするや、ツーフは
ようなど、ツーフは
しよう、英後、ベタビヤ
船入港し、その船
とあるワルニナール在り、これをツーフが
聞き右る全財産を
蘭船の入港を絶ち、ツーフ北田部の
うえいえんびんてんのか、ワルデナール
いつのしか、英の支配
なることとてう、英の
在る蘭館を英の手
ること命じ、ツーフは

まそ等彼を西宇和郡に移し、ワルデナールが
英を属する人をして日本人を
害心無きことを告げ、ワルデナールをしてツーフを救
り助命を懇求するの止むを得ざるに至らしめ、ツーフは
彼等をして其の罪を悔ひ改めたるを詳細に述べ
若心の任意ならざるを訴へ大切なる訴訟
本田越前守正勝の子二人ある女を
ハ是なることを。
ツーフの日本在留中十七歳より五十歳まで凡そ通算
ハ天し男子ハ十

（八月廿一日記）

○此程帝劇で演じた坂本龍馬をそれ。北優
ハ近世の政治家や幕末の志士に扮する種々の
興味を抱くものである。彼の相貌、体格、品
位のあるところ快演する。大熱心なる、記分

生といふ、蓋し長崎の眼鏡寺の略

肌のあるもの、物を越して屋七まで、龍馬を挙
ぐる際の条件、ひそめの時代つて
あの龍馬が薩長同盟を回る幕末の一齣の頃
の龍馬が薩長同盟を極めて困難な維新史上の一齣の頃
けんの理解の上に来るへ訪ねるのを、可なり大
幕をやりつけてゐるくの観客を取て倦き易き
未だこういう近来の彼の人気が出らーもあるこ
と予外にも。七市の演芸が人を救すてい
我代の所の北優の得意が多いが、笑い所へどうか
と思つたが、雁次郎張りで楽のこうまくやつての
けた。

○永見徳太郎四年前に生別した南吉七回忌の為

八月廿一日記

を踏ひまわり、おさりを浴びるこの上ない興味を感じて、こんな寄席がもっとあればよいと思うた。

えまで飲う南吉人の仕事未つとも異坊未信恵が本能寺の事まいと残心であつた。北市まで信恵が本能寺の事まいと我々は大勢の一人の異坊が本能寺の変、漆の如き顔面をしてゐるのこれ人事実が変なのも信恵が南蛮人かへ知らるのかが善をを近つけておいてもーてもこんな異坊が全くの奴隷で人間らしいことを許さないつ

九月廿日日本映画人に接触出来ることのある

が築かれ人間である彼等は資暦二年十月九の夜出島のオランダ商館から抜け出て、日本の服装をして丸山に行き、ひしもちの家に泊まったことがある。

黒坊の生活として更に海行もあの比丘尼(ねひる)カピタン参行る女の時ても感えた此のねぎ(ねぎ)やり、人家の屋根と上つて、風をうつかけ、ゆる縁端、ちょっと攀ってそこを飛ばしてうるものとかし終となるくらしあり二年の取締りの幸運しかも比丘尼である。

不埒な三侯が羅馬に使節を派したことについてのうわさしい記事がある。三侯と大村純忠の三大名を指すものであろう。有馬晴信、大村純忠の保護者であった宗教初宗教を選んだ義務の最も先んじて天主教をなした年であった。神学を修業し織田信長が日根と近を踏んだことをうの如き信念を敬の教えをもって義務を果たし、火急をうけ吸なく義務の途中伊東祐千代を選定し

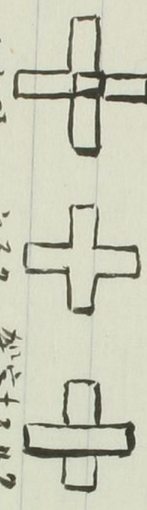
萬千代は日向沃肥の領主伊集院氏の支流伊東修理亮
の長子で、幼時十二才、母と共に洗礼を受け
紅顔の美少年であつた。他と同行して使節も
皆十二才以下の未成年ばかりであつた。
天正十年正月二十三日（千五百八十二年二月二十二日）
筒船に乗つて船出し、羅馬（大歐洲）を
はじめ八年目の十月を外国で暮し、翌年帰朝
長崎に着いた。秀吉の天下統一
すべき夏つてゐたそのさ
日本人と歐洲人との外人まで之れを被
け外人が上陸すると、波止場を十字架を墨くろ
くと深め出したので歐洲まで知らしめた。
國の船かも知れぬと来た時も丈の上陸あつた。之れを
治くことがある。幼うすることきるの國交の上外
國の姫君を来すことを甚しいとドクトル、キユル
こうスの建議を採用して奉行への命を伝達
差尾石見守日向岩瀬伊賀守であつた。之れ後者
去の外國交涉とも
ひもあるまい。

稲作と露酸の為め松
延えひ、露酸で梅毒を
て行ふことをつゝしむ
ある

歐洲の蓄化に乾て無残の話としよいも

名人となせる等ここえんとする
人未だ此町の住人にて、寛文九年三長崎を行ひ彼と
路径を尽くることを命じ
南蛮寺柱柳の基督像と
えんに像これ出来あり
切支丹宗門のことそれ
来聖像の心を代るべしとの恐れ
から、無残も心ある
役の心二十枚の大形
まとめ、世の萩原祐佐
あることも比考ひつつ
ついて綴術術を

能勢家 池田家 仙石家 佐竹家 伊達家 [illegible]
六見川内田 [illegible] 作倉 堀田 [illegible]
田札くるす、中川家くるます、三光家 祇園守、
リルフ、ヘ三光家 祇園守、
中村家丸に十の字 [illegible] 家 [illegible]
子家 [illegible] 守、山本家四つ石 [illegible]
家五つ石 [illegible] 丹家丸に十の字 剣
[illegible] ません、五つ割たます、
[illegible] 前津 [illegible] 阿波 [illegible]
丸 [illegible] 丹波家 [illegible]



○前掲山陽因縁の茶具を富士見亭に列す。茶器の来歴は
西村徳太郎氏より本日贈与を受けたるもの、説明も亦
氏より聞く、余が此等の茶器に対し多年の欲を
収めたるなり、余が新婚を祝せんが為めに、今日
山陽因縁の茶具を一堂に飾りたるは亦一奇事と
なすべし。北荘のものの便宜を得ることもあるべく、更に深
き意義を有するものに非ざるなり。
八月廿三日記

No. 1

湿気未だ当窓に芳香を発するに
鈍菜を煮、先生着と
事有て、市役所へ出頭
きに所在不明の為遂に
込む。立春と称して
さ汗客有れども
ほで盛夏の候
実に採菜お
を以て一客
実に幾ばくの
ち松末寿中

近今有名の一番組にて出来
山内先生心陸し再興落成
餘の陰ニ翁と書画前賞
若葉時の英集に於中
する形判前書の附る
先生ニ陸軍醉山内ニ
為ニ陸軍中ニ先生の
宗ニ連和尚ニ
長和尚ニ
招待の山内邸ニ
素材ニ西廣院

該宗ニ
於邊和
之花ニ
為ニ
契ニ
国家の
招待ニ
菓物ニ
翁の
年ニ

お手由と拝了其後先生よりお便りを以て
来を伺ひ、真木先生の小著作も天下の紙又と言ふ
伺ひて、御の深実の技術て技術の妙理の事柱と申候
候せめ度希望之至、程なく御手紙も参り、拙句
拙句御採用を伺ひ無事と安心仕候、当冬、地之山
先生と来雪を踏て、盛悦、咽と
当冬の上も実お互に事ある筈も伺ひ
小望嘗を祈申度希望之至、拙句、拙速乍
後便を以、奉、座之候、山陰

句の集刻も御出之候、
政治子集当公来也
金沢滞留無事
御座候て、頼朱と
存候の句、時雨する、遠里
不存、秋の山、当しの
掲載先集もかちて、
那中山の刻掲影
中山の物之句の刻ノ形、
き一冊(珠)前現在所来
ケ月之冬之形、鈎龍形花暑

依依、又竹葉飯甘蔗甘
泗濱含化水三斐甲何ぞ
ぞと歎息仕る次第御望
お望通御郵送仕候、淺野
とは参考と一冊と和歌を
お出御稽考と御指教申上
淺草新次

市河先生

玉案下

江東散史

敬具

西村徳太郎

○金前日淵と乗して詩を賦するの趣を言ふ、所
て未曾悪さいることのあり、更なる二三を挿足せんと、
淵人一茶の句三三一升でいくらこの秋の玲瓏
国々共の玲瓏玉露の
玉葉も共價玉と淵んとぞ、
日秋の共の浮共冷々人もして
しも、詩人四ツ出根秋の浄冷こ、
自醒と、草も木を見て快を
聴くも、説あり、詩人の四ツ
一枕芭蕉雨、四ツ深雨竹
をつ雨珠と芭蕉と解んで
も平凡の家宅も村落も

甚だ妙を為すものあり、曰「天抱孤村来」、曰「江抱屈如
淡」、曰「清渓天拱荒涼宅」曰く「野天帯荒川
境」、天を配してこそ此等は美化するなれ、夜天又一種
の味あり、詩（曰「近聴船知渡櫓響」）一夜漁天夜舩
帰。天と云へば魚、帰天、魚に配して天亦一種の風味
あり、曰「南山雨歇春流急、多少漁上浅沙」、曰「一
夜東風吹雨過、満江新天長魚鰕」、飛瀑は天の
崇高なるものなり也。瀑勢を雷に比する詩に「瀑勢
雷霆轟」あり、曰く「飛泉数丈雨淋漓」曰「瀑布
杉松常帯雨、夕陽彩翠忽成虹」、皆飛瀑を形
容して一種の味を覚ゆるなり、天は比喩に用ゐ
てまた一種の趣を寄す、曰「路若天如天狗重荘」

桃花乱落如紅雨、曰揺落愁英墜紅雨、天は風
景の半ばを占めて其状百端なれば天を離れては風景
索然たらん、詩人天字を禁じうるならば詩は大半の味を
失ふべしあるかな。
○なる大隈侯別邸に半日志侯所蔵の書画調べ
を為し、其の家に存すべきこともを人と共にせし可なる
ものを検出す、大谷光演句仏上人の蕪村に其
珍一箇に大根を音せる（一画）あり、前後に一
句を題す云く
風呂田吹や大隈侯の聴耳のぬし
○俳人一茶の句卒然として読めば卒直に目前の

事もいふ共言を尽せる所に當るものあり。
然れども往々にして含蓄の深きことものあり。左の數句のごときそれ。皆人生觀を歌へるもの。
汚れ雪世間並に解けぬ也　　一茶
人のめるまでそ花さく木もれ日　　同
顧れば白い物ばかり浮世かな　　同
世の中よ蝶から生れ蝶から死ぬる　　同
露の世をおもしろく今朝の秋　　同
芝の戸やあけ放せば花が散　　同
花のあとそのもみぢも若きの美しき　　同
人をとる昔は笑ひとる今は泣　　同
北窓の雨と呼る我訓を害す、其一生雨かな。

撮影製

其一生を次つぎと遣んバ、許田重くして味なし。國語の長所の一端を見るべし。
左の如きも俳句も一茶の句と同じく人生觀を寓す

雪降や我門きりの人こころ　　紀逸
白雲や無分別なる翌ところ
枯てまだ戦き心のぬけぬ蝶
遥根山乾燥くも人ぞ恋ひ
大晦の定めなきこそ世のさだめ　　其角
冬ごもり又いつ逢ん此別　　芭蕉
子や飯くふ時の涙こ

絶筆と金つばきもて
啄木鳥や枯木をさそう花のあい
一抱へあれと柳のうつ
萬枯れて我や乞食の夢
かしまや江を見ル一人の泊り舟一茶
此やうな赤世をさくら丸のうけもつ
一面ぬりの佛も人の墓山子かる
中てうの隙から咲く蕨の芽
夏時候の梦、ひぐらしの梦を少く多の
越かなる、此なる人をもてし涼味を感もこと女
し湖けさや岩にしみ入蝉の梦
みどろの句ま
九月

却て雑梦をこそ、
とある、新涼の候の隆めこと雑
醒ま、余が高岳の池に雑
家前をる」さるの雑
なる。今の家の池大
ま見渡んことをねこ
おきしものあるを未だ得ず、あの雑ハ態の
からまでおろ
ろと、
ま一海態の不のとこ

日清ニュース

日清ニュースの發刊に臨んで

會社創業當時の思出

島田秀人

專務取締役　吉田

我日清の前途は輝け共多事である

あらうが事實はその社長併幹部グル
犠牲となつてゐるのである。世の中に
業などは全くそれである。印刷され
が、印刷會社の社長などは、その名譽
分は妙な經歷があつて、間接ながら少
となつたり、國書刊行會や文明協會
て、五十年一貫して活字に絶へざる奇
獻をしてゐるかも知れんが、それは全
思つてゐぬ。然るに自分が心ある人々
著者若くは編纂者若くは發行者とし
るけれども、背つて一たびも印刷業
導の論になると、この營業は文化に

日清ニユース

日清ニユースの發刊に臨んで

社長　市島謙吉

日清ニユースの生誕に當り、吾々は此場合多少の鬱懐を吐かざるを得ない。一將功成り萬骨枯とは、單り軍事に就て、詩人が歌つたのではなく。萬般の事業に就いて多數の人を犠牲にし、功が一人に歸するは、昔も今も餘り變りがない。巍然たる大厦層樓、その建築は某技師の設計として褒め稱へらるのみで、これに參加した多數從業員の事などは全く沒却され、一顧を與へるものすら無い。事實に於て何萬何十萬の煉瓦を一ツ〳〵積み上ねば建築は成らぬのである。鐵骨にしてもコンクリートにしても外面に顯はれない所に勞は非常に大なるものがあるのに、それは全く閑却されてゐる。他の業務に這般の例を採るまでもなく、吾が印刷業に於て採字植字は煉瓦に比すれば幾百分の一とも云ふべき微細のものを組み合はせるもので、それが印刷業の基礎となるものであるが、其の衝に當る從業員の勞苦は容易ならぬものであるのに、それ等の功は表立ずに沒了されて仕舞ふのである。自分などは印刷會社の社長をしてゐるから、多くの從業員を犠牲にして其の功を己れ一人擅斷してゐるかにも見へるであらうが事實はその社長併ㇾ幹部グルミ世間に閑却されて、文學者や著作家の犠牲となつてゐるのである。世の中に緣の下の力持と云ふ諺があるが、活版業などは全くそれである。印刷された圖書の著者こそ世に持て囃されもするが、印刷會社の社長などは、その名譽を些しにても頒たるものではない。自分は妙な經歷があつて、間接ながら少年の時早く活版に觸れ、長じて新聞記者となつたり、國書刊行會や文明協會や早稻田出版部などの經營をやつたりして、五十年一貫して活字に絶へざる奇緣がある。隨つて日本の文化に相當の貢獻をしてゐるかも知れんが、それは全く印刷會社のお蔭であつて自分の功とは思つてゐぬ。然るに自分が心ある人々から多少功績を云々さるゝ時は、自分を著者若くは編纂者若くは發行者としてゞあつて、十年餘印刷會社の社長をしてゐるけれども、曾つて一たびも印刷者として功を稱せられた例はない。實は損得の論になると、この營業は文化に直接の大關係がありながら、これほど損なものは無いとも云ひ得よう。併し緣の下の力持をするものが無ければ、文化は決して起らない。誰れも彼れも功名に馳せ、名と譽のみに專らであつたら、隱れた仕事、下廻りの仕事は誰れが擔任するであらうか。緣の下の力持こそ、實は事業の大部分をなすものである、乃ち大動力である、名や譽の爲めにせず、隱れて間斷なく文化に貢獻してゐる所に印刷會社の價値があり。勞働の貴さがあるのである。今度吾社に生る、ニュースは、敢て吾々の不平を世間に訴へん爲めでなく、亦社業を宣傳する爲めでもなく、お互緣の下にあるものが、世間に知れないことを語り合つて、鬱懐を散じ社内の情意を疏通し、重ねて人格の修養に資せんとするに外ならぬ。平生社外の人の著述ばかりを印行してゐる吾社が、社内の著述を印行するのはこれが始めてあることを思ふと。私は一種の快感に打れざるを得ない。願くば此の呱々の聲を上げた愛兒が、健全なる發育を遂げ、會社にふさはしい大をなさんことを。

我日清の前途は輝け共多事である

專務取締役　吉田秀人

日清ニュースの發刊を祝し此の紙面を通じて諸君に告ぐ。

諸君我日清は今や印刷業界に於て正に一流會社として他人も許し自らも亦信ずるの域に達したのであります。是れ全く吾々九百の從業員が一致協力の結果である事は申す迄もありません。さりながら押寄する不景氣の深酷さは全く想像外にして當事者の是れに對する苦心は深甚なるものであります。この空前にして或は絶後やも計り難き不景氣を乘切るには吾々從業員は如何なる心掛けと決心とを要するか。御承知の通り昨年來引續ける諸設備の改善並に諸機械の增設に依りて其能率は頗る向上し我社の作業能力は非常に增加して居る。諸君は此の不景氣に何の爲めの增設改善かと思はるゝであろうが同業者間の競爭は一日も安閑として居られないのであります然るに仕事の分量は此大不景氣の爲めに減退し、のみならず受値の單價は、著しく低下を來し或は將來尙一層低下するやも計られない現狀である斯く數へ來れば業態の種子は一つも無いのであります、而し茲に大に考へねばならない事は油斷をすれば鋼鐵艦ですら風無きに沈沒するが貧弱なる木舟も乘組員の一致協力、必死の男を奮へ暴風雨の大海をも乘切る事が出來るのであります。成門前にも申しました如く此不景氣は並大抵のものではないのであるが吾々全從業員が和衷協同其力を一にして、各其務めに對し細心の注意を拂ひ相互に愼ましく努力懃まなかつたならば我日清には不景氣の神は其影を沒するでありませう。然らば如何すれば不景氣の神の征伏が出來るか、それは頗る簡單にして平凡であるが而し實行となると至難の事である。かるが故に私は凡そ三項目を擧げて日清九百の從業員各位に勗し而して願ふ卽ち

一、一枚の紙、一滴のインキ、一滴の油、一本のボロ、一點の電燈、一管の瓦斯も無駄にせざる事、諸君の些細の注意は直ちに萬金を生む身の爲め社の爲め國の爲めである。

二、各其仕事に着手する前に細心の注意を拂ひ遺損をせざる事、一人の損失は會社全員のヤリソコナイと同じ結果になり實に目に見えざる甚大の損失となる。

三、吾々從業員一同は會社に使はれると思はず會社を我物と思ひ愉快に働く事、愉快に働くのと不愉快に働くのとは同じ骨を折りながら其氣持結果は天地の異ひである。

之を要するに我日清九百の從業員各位、幸にして私の希望を入れ各自其務に精進せられんか日清の前途は實に洋々として輝けるものあるべし。諸君願はくば日清印刷は各自己の物と思ひよく愛しよく護られん事を懇望する次第であります。

會社創業當時の思出

島田圓成

日清ニュースが發刊されることは、まことに慶賀すべきことである。就いては私も創業當時の思出とも題して、創業當時より二十有餘年後の今日、その所感の一端を斷片的乍ら記憶のまゝ記すことも多少意義あり又、興味あることゝ考へます。先づ第一に

創業當時榎町七番地の土地の狀況及び環境の狀態を述べてみたいと思ふ。當七番地内には當時下宿屋が二軒ありまして一つは龍池館、他は記憶にありません。他に住宅が四五軒ありまして、そのうちの一軒に早大の安部磯雄先生の家が、今の平版課の中央にあつたと記憶します。現在社の前の道路は幅一間足らずの細徑で、これは最初より貫通して居り、その兩側に櫻の並木があつて、花時には花見ができる位でした。

この土地は、濱松寺の境内の一部が埋められたもので當時の榎町も肝要の道路だつたのですが、町としては貧弱であつた。一方鶴巻町の通りも、田圃の中を山吹町から大學前まで貫通してありましたが、田舍道も同樣で二三寸もある玉石が掘り込まれて、平常人の通路ではありませんでした。從つて兩側には殆んど田圃で、一部分づゝ廓埜で埋められ、貧弱な商店がバラ〳〵建ちました。そんな狀態でありましたから、今の山吹小學校は最初特殊小學校の敷地として決定せられてゐたことも事實ですが、徐々に下町よりの移住者も增加するに從つて、特殊小學校の設立とは實にこの土地を侮辱するものだとの反對で、現在の普通小學校が

のそのかこれ
御ちゃうふを
武の古社がよ
栄く時の
丈んえ伏賀
の奥すい
一種の
物余
かめそひあ

お
迂
二

晩まで
有がとうございました
馬場も（）やく人力車一の上まで左ても
ございます
二る十枚（にやうたい）取ろうてゝ朝から
晩までかゝりました
此方が唄の通りかゝるべくかと
拵の参下さるべくそうく
三月九の
大隈様
御奥さま
久米邦武

吹の内二る十枚とのことに
かしこまある三拾銭のハ
八月十五日
又ござります、上等の紙が軽
ござりまして紙で清而此こう拵一冊仕差
上ます、自分ハ解説の
ことハ
十分ハ決して
及ばう、仕し鉢いが
心あり、決して
勘弁の
うまくハ
考ぬてあれとも

大隈侯の早くかく金

五代友厚の妻の手紙の美人を云々
ある手紙の早く帰を辞し浪花の花柳を
お訪ねもよろしく可という事、筆に暮
を煩わす事、もし机の
やうなり、一日延めに二十四日に延めハ百
日目にもいさゝかの事あるやうなり
げるもあり
伊藤博文も妻の名を書く事を福地源
一郎を書記官として外国へ行れし時の家の者となりて弥
んとするも彼は生外の地を
め人とするも彼の事ハ弥利を愛する

井上馨の書簡の中、無処着
の筆なり、ハ大らかにくべきを太を脱
したるものと書いたるもの。大隈大花と書くべ
きを大花大花と書きたるもの。
陸奥宗光の妻こと亦書簡の事あり
あるし、陸奥の雅子橋の妻の妹の藤
にて住しとも後七尾高流店の住しとも
家かゝること初めて知りとも
かの初年ハ書簡の往復にお岡を
用いることゝ云し稀なりと思へハ大概
ハ巻紙の端を折りて糊をつけるもの

状況に入れて推測しうるが、十二三年頃
までの寺容を検するに際しての一端を示すもの。（八月
十五日）

跋　検の際のつぎのことを附記しておく。

薬師寺仏は寺体と調和のとれた特徴ある姿で、西郷
北方大尾と似た家あり、黒田の家風と似た様
様行体ある姿のみとめられ、五代勢力と
て巧みずいとしたところ、薬師寺仏は、木下あり、伊豆の
奴時代後半の少くとも山形の晩年
骨ぶいをするものも四半年代へだたるもの
の穏やかな体也　井上の寺もどことなく長

橿原製

物九百）の代表あんこ西坊ちまち主体後
薬師寺（走野）へ吸収時寺をたゝす。後学
者時に得ざる点あり。
作製は時代ではとても山吹の寺
うであろう。大木の石組屋の寺風水桜の味
あり作吸寺完江戸平鈴吹直樹
（九百）の配前人あるに似ず。岩倉の寺
云と主角あり、月堂の代すや寺前を
脱す代表さうし、三本の寺号と温順
なら女人のおし、枝垣のおもと
いうことを稀な早稲田と在する寺との枝
ちうちも代筆と筆とをもつちう西国寺の

古来の歌、山陽風を脱して、陸奥宗光、中井弘の書ニッく
…などことごとく似るものあれこれ巧ろまず、

つぎつぎの文行堂書店を訪いつつ
過ぐる書簡二通（外と一冊の書をのぞく此度
本ぞろい珍也、去る三浦屋内祝の書き
留めし半紙二百枚の表に帝世の記とあり左行に辛一乃延
二年、酉三月吉日とあり、古来多くの名妓を生じ三浦
内證とあり、その後の奥の三浦楼
尾の奥後の書留めに、慶応二年八

改元文久元年、まで四ヶ年、文久三年に及ぶ
元年號を始めて婚妓の身
なり四季おりおりの衣類の柄を記しともあり、
女子引元一礼の言や、年中行事のことや、婚
妓三年勤定や、初櫓後久や、
稽古の事、すべて、振袖の書かた免振袖
春と改名しおくことや、吹上、婚妓の呼出し
の件、などいろいろの事ども一々紅まで
違あるまじ、三浦屋いつ廃業しゃ未だ
調べてえるいとまなきも
しばの古原に此家ありしかし自分のものの荒あり
草陸のさま

元色黄金のぬいとり
但一ツ袂けだもの
〇早稲田の教科書
村出博士を煩して京都
の一二寺をもとめ
元禄二云々
元禄十四年四月日
一元紋白縮緬
但利足七ヶ月ニ付
巳の五月ヨリ利ヲ落シ
元利共ニ

（地くろぬいとり
小袖壱ツ

複写製本

四十一月廿日
元紋白縮緬
但利足七ヶ月ニ付
巳の五月ヨリ利ヲ落シ
元利共ニ

（地くろぬいとり
小袖壱ツ
きぬ八丈壱ツ

利足引ノ分
外ニ二反あり

古着屋
裏面の文ニ云く

届額

文化元年三月廿日

右大将受徳書（花山院の手）

古義也　十の字所命元文成年
嵐雪父　菜嶋先生号倫歟次掲
為天の戊申之奥　額亦歟已酉歳
壱成而未有　額今茲甲子春　贋
司度白殿下政　邸
命花山右大将受徳
書不物本壬三月九日掲北堂祥記
其由云　伊若善紹尋新敬書

模原製

詞壱の内部を字とい一枚あり美と西
園寺公此代の地花の二字を書とる扁額
掲げまつる　これ大正辛酉十月と侍也
余が前年伊若家を訪ひしもの
一ことの由
当寺安心の一礼い額とそう二階
の上りロに掲げあり其文に云く

一札之事

一火事と義とは自一郷公儀掟
ら仰出し候ニ付　猥成る事有之
候ハゝ　急度可申上候　為後日
一札如件

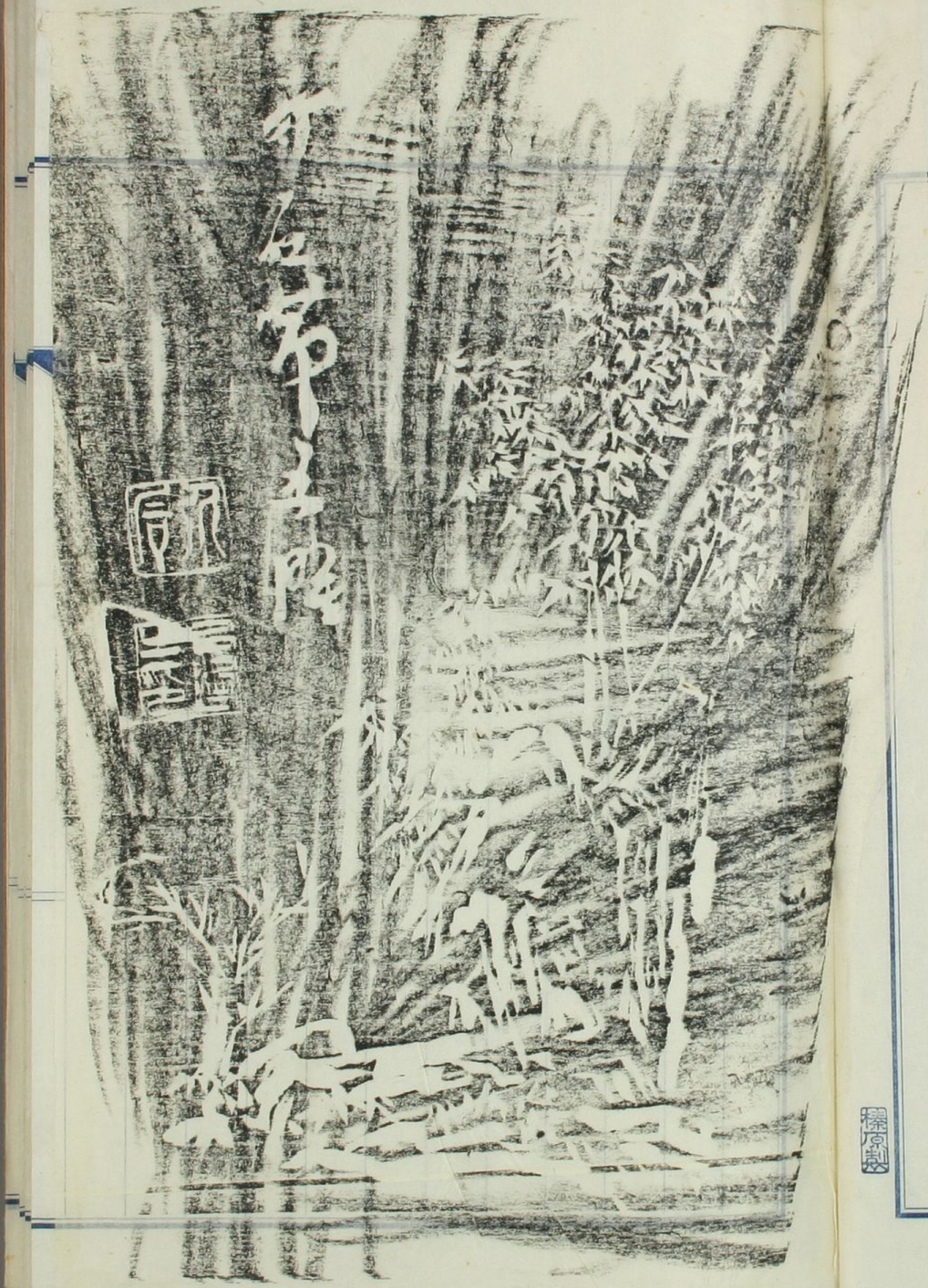
向後心安くする刻記牧師
又い無拘る、ことおこと冬、外
ことも月ことおることも埼くれ甚
百雷、九木ことれこと面こ人こて
月心二仆何も亭な家内某
借屋お、て一笑人仍為
日一札出件

東堀川四丁目
寛永堂年頃
卯月廿三日
圭菴

光年境川、参ることも時い日、改の遺印全部

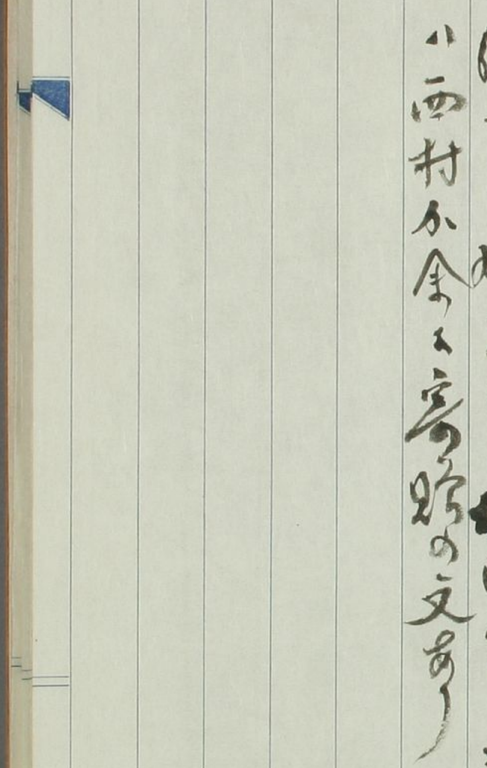
を持すること心しく、竝の文いすべて宣伝ポスター云
とまるるるるつき）愛と収めおくもの也
（八月廿八日）
○各所ることも日ことの宣伝ポスター云
近百論ることも其時尾のこの抵抗工風
ることも、今左、紙尾楼原のポスターを収
も、田舎深氏の国産病に朝鮮を載せて
る国を流しるが云ことの一ポスター近也
一論を知る料のとこ他の為めの収め
おく、

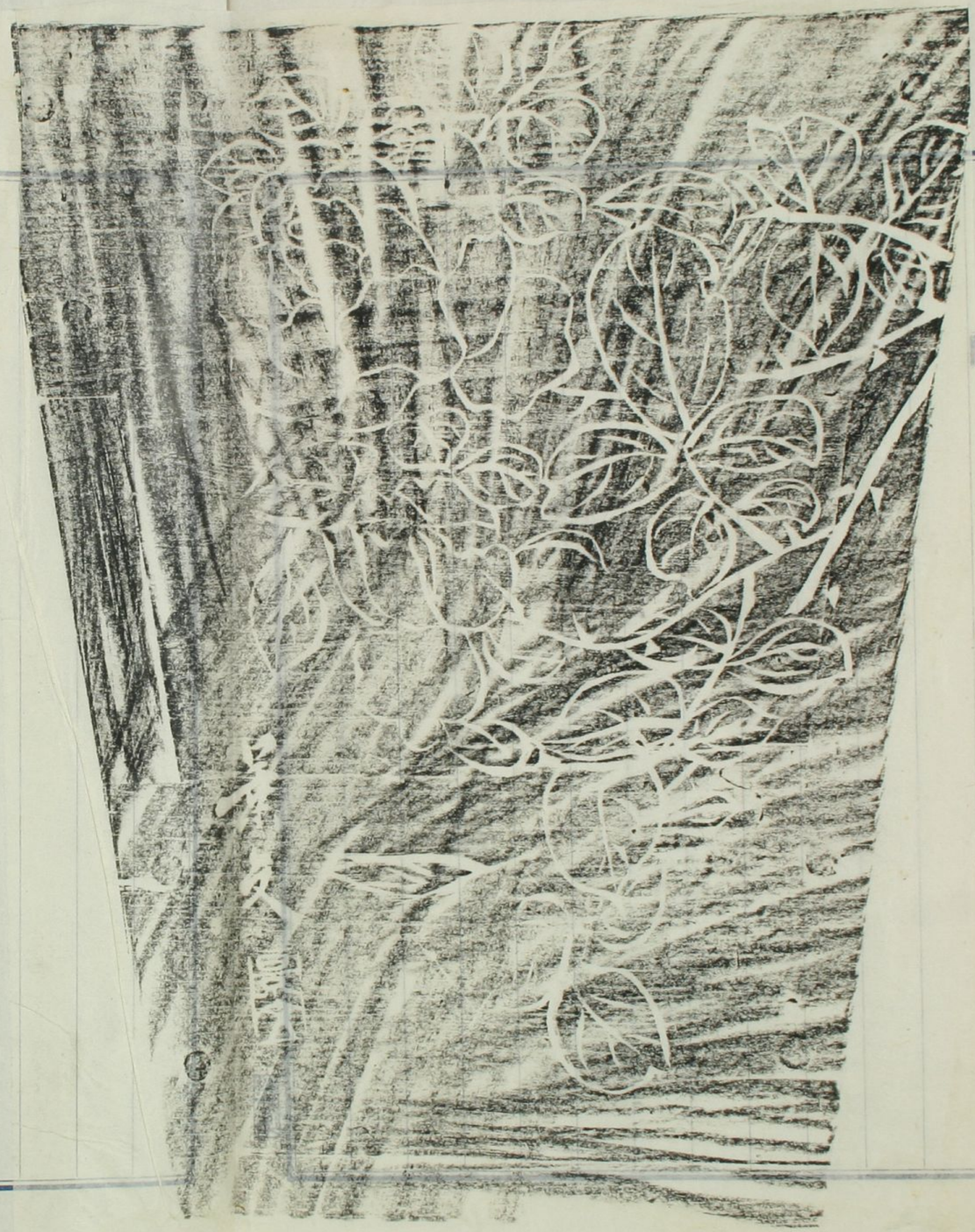
東京
はい原



操原製

其の大さも扨そうそ推まぐし 木江の波瀬に
底辰とあり、又四三の平の仙なることもあり
し、山陽の吉未だ晩年のことゝて熟さゝいる
ハらず 四吉なれバ也、二号 四のケヤキを此ゝ
京都木工の先えもなん心 細工物ゟ来れて喜
合もあり、又を入れ花を投まぐし幸よ
五家とや、時代なる 釣瓶縄の 口
形の輪轄あり、之の 釣瓶二
個をはまかへる重宝そ 宜くべし、此ゟ朝迄
ハ時おも也の朝 花を入れて之まゝ 置
か





○古酒と琥珀色をもつ白合いを利
用して、いろ〳〵な細工係、紅色やや女性、
て就その回を婚礼に
けてある。大庭燈が三
泡盛を出して
後入れ、おもしろく
巴里の郊外の麦酒屋
ス、ドラデエと雌伏
人は談笑をつゞけ
る、シーボルトは日本の
日本の古曲音色
好ましと絢し

シーボルトの細君
ルツブルグより届く
て、漸やく出書が
でドオデエがシの許
ハシの芸術の時
あとのびた紀曲は終
ろうとのである。

私の婚礼は北海
の式頁から始
受妻の一頁を
あることにして

蘭館醫フランツ・フォン・シーボルト
遊女其扇（シーボルト著「ニッポン」所載）

○新潟の長谷堂成川の人某より雲林の畫集三冊を贈られ、昨年の冬成川氏より愛玩手帖大生化と題せる北の冊の巻首に二三の北の畫集に北家の花鳥を縮影したるものにて、新潟の印刷としては出来がよく、収むる所の画の数百に垂んとするに、山水多数をなかに人物の数十幅あり、筆致見るべきものあり。重林の大観とよぶことが出来、よく信ありの如くにして、同氏はよくものが存して後に花せんとするものがあらう。

八月三十日の記

巻首に雲林の画の収めてある、半年堂の肖像と云い、雲林の方像をもるのへこんが初めて、大いに悦んだ。

○雨と就その詩題の前と記したが文章よからぬ為め更めて左に収む。

以下

4丁

白紙

地引網　（大野靜方筆）